

今井原屋敷遺跡

—第2地点—

社会福祉法人本庄ひまわり福祉会社会福祉
施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

本庄市遺跡調査会

今井原屋敷遺跡

—第2地点—

社会福祉法人本庄ひまわり福祉会社会福祉
施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

本庄市遺跡調査会

序

今井原屋敷遺跡が所在する本庄市の今井地区周辺は、数多く重要な遺跡の分布する地域として知られています。縄文時代中・後期の古井戸・将監塚遺跡、古墳時代中期の後張遺跡、古墳時代後期の今井川越田遺跡などは県内屈指の大規模集落遺跡であり、また、第2次大戦中に造成された児玉飛行場跡など当地方では希少な戦争遺構も存在しています。

本書に報告の今井原屋敷遺跡も、昭和58年度に、児玉工業団地の取付道路建設に伴う調査が実施され、平安時代を中心とする集落遺跡が検出されるとともに、墨書土師器、灰釉皿などの貴重な資料が発見されています。今回の調査においても平安時代の住居跡4棟が確認され、また数多くの土器類も出土し、郷土の古代史の解明に向け、さらに新たな資料を加えることができました。

今後は、本書が学術研究、生涯学習、学校教育の場に広く活用されますとともに、さらなる埋蔵文化財保護の推進に寄与することを希望する次第です。

最後になりましたが、当遺跡調査会の埋蔵文化財保存事業に格別のご理解を賜り、現地発掘調査から、資料の整理調査、さらには本書の刊行に至るまで多大なご協力を頂戴した本庄ひまわり福社会様には、ここにあらためて深甚の謝意を表する次第です。また、調査に際してご指導、ご教示を賜りました方々、発掘現場で直接作業の労にあられた皆様に心から御礼を申し上げます。

平成16年3月

本庄市遺跡調査会

会長 福島 巖

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市大字今井字原屋敷1,037番1他に所在する今井原屋敷遺跡第2地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は、本庄市大字牧西1,258番地 社会福祉法人本庄ひまわり福祉会が計画する社会福祉施設建設に伴い、事前の記録保存を目的として本庄市遺跡調査会が実施したものである。
3. 発掘調査は、今井原屋敷遺跡の5,479㎡を対象として実施した。
4. 発掘調査期間は以下のとおりである。

自 平成11年7月21日
至 平成11年8月25日
5. 発掘調査担当者は以下のとおりである。

本庄市遺跡調査会 調査員 増田 一裕
6. 発掘調査期間は以下のとおりである。

自 平成11年8月25日
至 平成16年3月31日
7. 整理調査担当者は以下のとおりである。

本庄市遺跡調査会 調査員 増田 一裕
同 太田 博之
8. 整理調査は、有限会社 毛野考古学研究所に委託した。
9. 本文の執筆は、Iを本庄市教育委員会事務局が、遺物観察表の作成を有山径世（有限会社 毛野考古学研究所 調査部調査研究員）が、その他を和久 裕昭（有限会社 毛野考古学研究所 調査部主任調査研究員）が担当した。
10. 本書の編集は和久が担当した。
11. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他報告書に関する資料は、本庄市教育委員会において保管している。
12. 発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重なご助言、ご指導、ご協力を賜りました。ご芳名を記し感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

大熊 季広 金子 彰男 車崎 正彦 恋河内 昭彦 昆 彰生 坂本 和俊 杉山 晋作 鈴木 徳雄
外尾 常人 田村 誠 徳山 寿樹 鳥羽 政之 長井 正欣 中沢 良一 長瀧 歳康 日高 慎
松澤 浩一 丸山 修 矢内 勲
13. 今井原屋敷遺跡第2地点の調査にかかる本庄市遺跡調査会の組織は、以下のとおりである（平成15年度現在）。

会 長	福 島 巖	[本庄市教育委員会教育長]
理 事	揖 斐 龍一	[本庄市教育委員会事務局長 (会長代理)]
同	柴崎起三雄	[本庄市文化財保護審議委員]
同	野村 廣久	[同]
監 事	亀田 能紀	[本庄市行政委員会事務局長]
同	斉藤 貞子	[本庄市会計課長]
幹 事	吉田 敬一	[社会教育課長]
同	桜場 幸男	[社会教育課長補佐]
同	吉田 稔	[社会教育課文化財保護係長]
同	太田 博之	[社会教育課文化財保護係主査]
同	我妻 浩子	[社会教育課文化財保護係主査]
同	松本 完	[社会教育課臨時職員]
同	町田奈緒子	[同]
調 査 員	太田 博之	[社会教育課文化財保護係主査]
同	松本 完	[社会教育課臨時職員]
同	町田奈緒子	[同]

凡 例

1. 本書所収の各種遺構図における方位針は、座標北を示す。
2. 各遺構断面図に付記した水準数値は、東京湾平均海面(T. P.)に基づく海拔を m 単位にて示したものである。
3. 本書掲載の地形図については、各図の隅に出典を明記してある。
4. 本調査における遺構名称は下記の記号で示し、本書掲載の本文、挿図、写真図版中の遺構名称も同一の記号を用いた。

SI・・・竪穴住居跡 SK・・・土坑 P・・・ピット

5. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。個別の図におけるスケールにも、縮尺を明示してある。

[遺構図]

遺跡全体図・・・1 : 150 SI・・・1 : 60

[遺物実測図]

土器、土師器、須恵器、砥石・・・1 : 4

6. 検出遺構観察表(表6・7)中、および本文中の遺構に関する事実記載においては、単位として m を用い、小数点以下第2位までの数値を四捨五入のうえ示している。
7. 遺物観察表(表1～5)中の単位については、法量に cm、重さに g を用いている。[]内の数値は推定値、()内の数値は最大残存値をそれぞれ示す。
8. 本書にて引用、ないし制作にあたって参照した文献については、その主なものを本文末にまとめて記載した。
9. 本書巻末に掲げた報告書抄録では、遺跡の位置表示として、2002(平成14)年4月1日施行の測量法改正で採用された世界測地系(新国家座標)に基づく緯度・経度、および改正以前の日本測地系(旧国家座標)に拠った緯度・経度の両者を併記している。

目 次

序

本庄市遺跡調査会会長 福島 巖

例 言

凡 例

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 地理的・歴史的環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 調査の方法と経過	6
1 調査の方法	6
2 調査の経過	6
IV 調査の成果	9
1 遺跡の概要	9
2 検出された遺構と遺物	9
(1) 住居跡	9
(2) その他の遺構	17
(3) 遺構外出土遺物	20
V まとめ	22

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図1 埼玉県の地形	2	図8 SI-02 出土遺物	13
図2 遺跡の位置	3	図9 SI-03	15
図3 本庄市内の主な遺跡	4	図10 SI-03 出土遺物	15
図4 遺跡全体図	7	図11 SI-04	16
図5 SI-01	9	図12 SI-04 出土遺物	17
図6 SI-01 出土遺物	10	図13 土坑・ピット群	18
図7 SI-02	12	図14 遺構外出土遺物	19

表目次

表1 SI-01 出土遺物観察表	11	表5 遺構外出土遺物観察表	20
表2 SI-02 出土遺物観察表	14	表6 土坑・ピット一覧表(1)	20
表3 SI-03 出土遺物観察表	15	表7 土坑・ピット一覧表(2)	21
表4 SI-04 出土遺物観察表	17		

写真図版目次

写真図版1 遺跡の位置および周辺の地形	SI-04
写真図版2 調査区全景	SI-04 カマド
SI-01 (1)	
SI-01 (2)	写真図版6 SI-04 遺物出土状況 調査風景
写真図版3 SI-01 カマド周辺	写真図版7 SI-01 出土遺物
SI-02 (1)	SI-02 出土遺物(1)
SI-02 (2)	写真図版8 SI-02 出土遺物(2)
写真図版4 SI-02 カマド周辺	SI-03 出土遺物
SI-02 遺物出土状況(1)	写真図版9 SI-04 出土遺物
SI-02 遺物出土状況(2)	遺構外出土遺物
写真図版5 SI-03	

I 調査に至る経緯

1998(平成10)年9月11日、本庄市大字牧西1258番地 社会福祉法人本庄ひまわり福祉会から、本庄市大字今井字原屋敷1037番1、1038番1、1039番1、1042番1の土地、合計5,479㎡に福祉施設建設の計画があり、これにかかる『埋蔵文化財の所在及び取扱いについて』の照会が、本庄市教育委員会に提出された。本庄市教育委員会で埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地の埋蔵文化財包蔵地の有無を調査したところ、当該の事業計画地には、周知の埋蔵文化財包蔵地今井原屋敷遺跡(53-101)が存在することが判明した。

今井原屋敷遺跡は、1983(昭和58)年度に児玉工業団地取付道路建設に伴い、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施し、古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落遺跡であることが知られていた。照会のあった福祉施設建設予定地は1983年度調査区の北側に隣接し、しかも今井原屋敷遺跡の中央部分にあたることから、先の調査によって検出された集落遺跡が連続しているものと考えられた。

本庄市教育委員会では、以上のような状況をふまえ、当該事業計画地について、埋蔵文化財の試掘調査を行うこととし、1999年3月4日から同19日の期間で現地調査を実施した。その結果、当該埋蔵文化財包蔵地において、古墳時代の住居跡3軒および中世の土坑4基と、完形の坏2点を含む土師器その他の遺物を検出した。

本庄市教育委員会では、以上の試掘調査の結果に基づいて、『埋蔵文化財の所在及び取扱いについて』の回答を事業者あて送付し、1. 協議のあった土地については周知の埋蔵文化財包蔵地である今井原屋敷遺跡が存在することから現状保存が望ましいこと、2. やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第57条2第1項、同第99条3第1項および文化財保護法施行令第5条第2項の規定に基づき埼玉県教育委員会あて埋蔵文化財発掘の届出を提出すること、3. 埋蔵文化財発掘の届出を提出の後は埼玉県教育委員会の指示に従い、当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4. 本回答後は関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後の協議の結果、他に福祉施設建設の適地がなく、社会福祉法人本庄ひまわり福祉会との間で契約を締結したうえで本庄市遺跡調査会が調査主体となり、発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査のための手続きは、1999年7月12日付で、事業者から文化財保護法第57条2第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、1999年8月12日付本教社発第112号で埋蔵文化財発掘の届出の取扱いについての副申を添え、同届出を同12日付本教社発第114号で埼玉県教育委員会あて進達した。また、同日付本遺会第1号で本庄市遺跡調査会から埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、同日付本教社発第111号で埼玉県教育委員会あて進達した。

現地における発掘調査は、1999年7月21日から同年8月25日までの期間で実施した。

II 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

本庄市は、埼玉県北西部に位置する人口約6万1,000人の中核都市である。埼玉県に属しながら、気候、風土、経済、文化などの各側面において、古くから隣接する群馬県南西部との関連が深い。近年では拠点法の制定をうけ、2004（平成16）年度の上越新幹線駅開業に前後して各種の開発事業が進められている。

市の北東部では、烏川などに由来する氾濫原（本庄低地）に南接する形で、本庄台地が位置する。同台地は、洪積世末期の立川期に神流川の堆積作用によって形成された扇状地性台地である。砂礫層を主体とするが、粘土層や粘質ローム層などが複雑に堆積しており、地点によってその様相は変化する。扇頂部は児玉郡神川村大字寄島地区にあり、扇端部は本庄市市街地北縁、さらには同市大字東五十子付近を通る。市の中央を東流する女堀川の浸食により、本庄低地と接する台地北側では河岸段丘が形成されている。段丘崖の高さは4～12m、崖線は8km前後にわたって東西に連なる。今井原屋敷遺跡は、女堀川を南に1.2kmほど隔てた本庄台地上の浅見山丘陵（大久保山）周辺部、標高約72mを測る位置に所在する。

2 歴史的環境

以下、市域における各時代の主要な遺跡、および今井原屋敷遺跡周辺の概況について記す。

〔旧石器時代〕 明確に遺構と認定しうる事例は、いまだ知られていない。宥勝寺北裏遺跡の調査にてローム層中より剥片が出ているが、これが現在までのところ市内唯一の包含層出土遺物である。他の遺物は、古墳時代の調査などにおいて混入といった形で副次的に見つかっている。石神境遺跡、社具路遺跡、西五十子田端遺跡にてナイフ形石器、古川端遺跡で細石刃、彫器、剥片、三杓山遺跡で船底形石器と尖

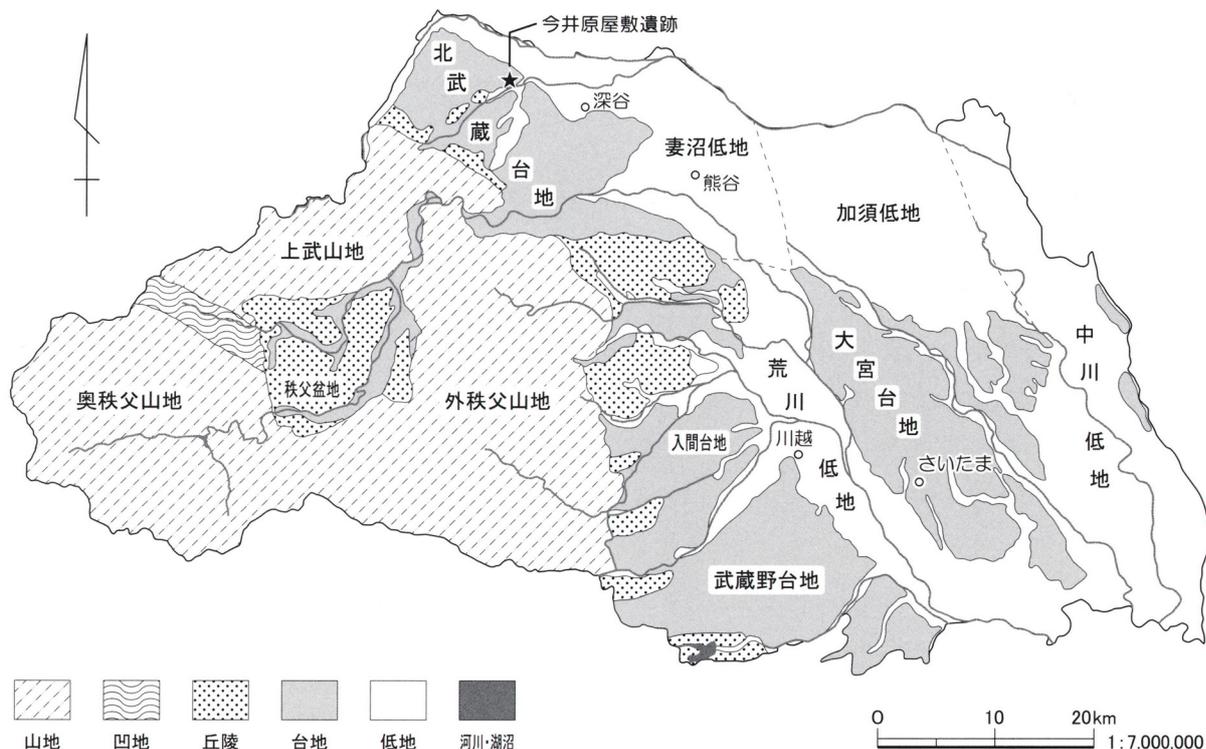


図1 埼玉県の地形



* 本庄市役所 1998 1:2,500 本庄市都市計画図16(IX-JC 14-4)をもとに作成。

図2 遺跡の位置

頭器、大久保山 I 遺跡にて石核、柏一丁目3番地内では尖頭器が、それぞれ採集されている。

〔縄文時代〕 将監塚^{しょうげんづか}、西富田前田^{とみだ}の両遺跡で集落跡が確認されている。将監塚遺跡では、中期を中心とする多数の住居跡が検出された。

図3で示した遺跡にて、主に中期から後期にかけての遺物の散布が知られる。このうち有勝寺北裏と大久保山Aの両遺跡は、晩期を除くほとんどの時期の遺物を包蔵する遺跡として特筆されよう。

草創期の資料が比較的そろっているのも、市域の特徴である。笠ヶ谷戸遺跡、将監塚遺跡では、有尖頭器が単独で、また大字小島の万年寺地区からは、草創期特有の大形打製石斧が出土した。有勝寺北裏遺跡では、小片ながら爪形文土器と多縄文系土器、および早期の押型文土器の破片が採集されている。

〔弥生時代〕 大久保山周辺に遺跡が比較的多く分布する。大久保山A遺跡では再埋葬とおぼしき中期の土坑1基、同ⅢB遺跡で後期の住居跡2軒、同ⅣA遺跡にて4軒、近接する山根遺跡でも住居跡の調査例がある。また、有勝寺北裏遺跡^{しんどう}で中・後期、下野堂地区では後期の土器破片がそれぞれ見つかっている。

〔古墳時代〕 4世紀（いわゆる五領式期）の集落遺跡は、女堀川中流域や男堀川周辺に集中する傾向を示す。一方、5世紀後半に入ると、大字西富田地区と本庄段丘崖地区を中心に、集落遺跡が急増する。こうした動向は、首長墓としての古墳葬制の採用、初期カマドの導入、加えて須恵器模倣品や大形甎の出現が示唆する社会的な変化の影響を受け、弥生時代以来の選地が変容していく過程ととらえることができよう。

6・7世紀（いわゆる鬼高式期）には、遺跡数がさらに増加する。6世紀に属する夏目遺跡第51号住居

遺跡地名一覧

縄文時代遺物出土地

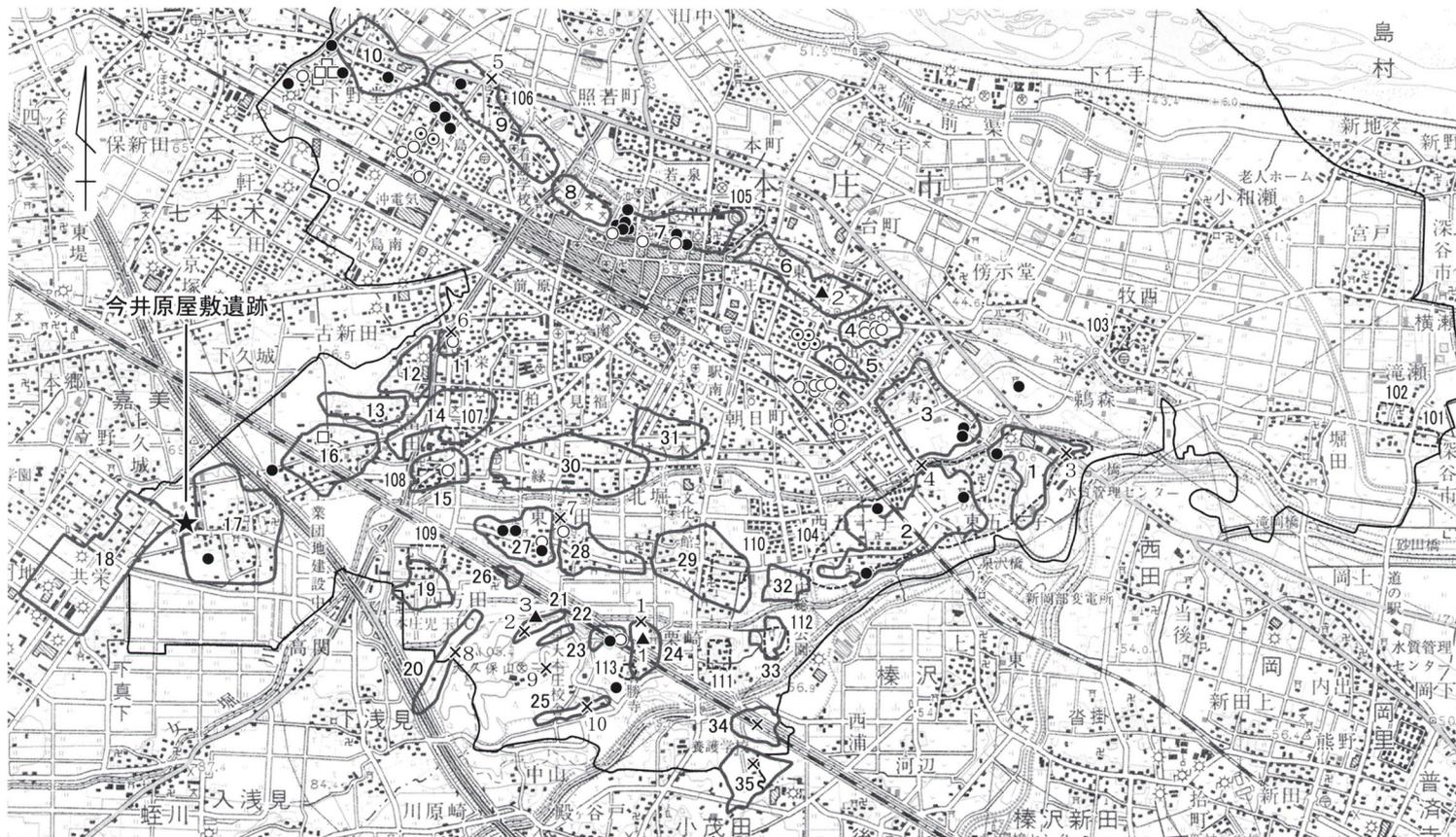
- 1 宥勝寺北裏遺跡 (早期～後期)
- 2 大久保山A遺跡 (早期～後期)
- 3 東五十子遺跡 (中期～後期)
- 4 諏訪新田遺跡 (中期)
- 5 小島遺跡 (中期)
- 6 二本松遺跡 (中期)
- 7 公卿塚古墳 (後期)
- 8 四方田字前山
- 9 大久保山B遺跡 (中期)
- 10 西谷遺跡 (前期)

弥生時代遺物出土地

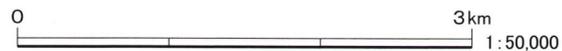
- 1 宥勝寺北裏遺跡
- 2 薬師堂遺跡
- 3 大久保山A遺跡

古墳時代～古代集落

- 1 東五十子遺跡 (4～10C)
- 2 西五十子遺跡 (6C～)
- 3 諏訪新田遺跡 (4～8C)
- 4 御堂坂遺跡 (6C～)
- 5 大塚遺跡 (6～10C)
- 6 薬師堂遺跡 (5～10C)
- 7 本町遺跡 (5C～)
- 8 北原遺跡 (6C～)
- 9 小島遺跡 (4～8C)
- 10 万年寺遺跡 (6～10C)
- 11 二本松遺跡 (5C)
- 12 夏目遺跡 (5～7C)
- 13 西富田新田遺跡 (5C)
- 14 薬師遺跡 (6～10C)
- 15 本郷遺跡 (5～7C)
- 16 東今井遺跡 (6C～)
- 17 西今井遺跡 (6C～)
- 18 北共和寺遺跡・古井戸遺跡 (6C～)
- 19 四方田遺跡 (5C～)
- 20 山根遺跡 (5C～)
- 21 大久保山A遺跡 (5C～)
- 22 大久保山C遺跡 (6～7C)



× 縄文時代遺物出土地 ▲ 弥生時代遺物出土地 □ 方形周溝墓 ● 古墳 (完存)
 ○ 古墳 (半壊) ○ 古墳 (痕跡) ◻ 古墳時代～古代集落 - - - 城跡・館跡・墳墓址



- | | | | | | | |
|------------------|------------------|----------------|-----------|------------|-----------|--------------|
| 23 前山遺跡 (5C～) | 29 本田遺跡 (6～8C) | 35 川原山遺跡 (5C～) | 104 五十子陣跡 | 107 富田氏館跡 | 110 北堀館跡 | 113 東谷中中世墳墓址 |
| 24 宥勝寺遺跡 (5～10C) | 30 伊丹堂遺跡 (6～7C) | | 105 本庄城跡 | 108 富田氏館跡 | 111 栗崎館跡 | |
| 25 西谷遺跡 (6～7C) | 31 笠ヶ谷戸遺跡 (5C～) | 城跡・館跡・墳墓址 | 106 小島氏館跡 | 109 四方田氏館跡 | 112 東本庄館跡 | |
| 26 下田遺跡 (6C～) | 32 諏訪台遺跡 (6～10C) | | | | | |
| 27 東富田遺跡 (5C～) | 33 東本庄遺跡 (6～10C) | 101 滝瀬陣屋跡 | | | | |
| 28 久下塚遺跡 (5C～) | 34 古川端遺跡 (5C～) | 102 滝瀬氏館跡 | | | | |
| | | 103 牧西氏館跡 | | | | |

* 国土地理院理 1998 1:50,000 地形図 NJ-54-30-15 (宇都宮15号) 高崎、および本庄市 1976 をもとに作成。同書付図中の掲載番号を流用している関係上、遺跡の番号が不連続となっている。

図3 本庄市内の主な遺跡

跡のカマドからは、祭祀に用いられた可能性のある高坏や三連小埴が出土している。カマド構築時に袖へ白玉や勾玉を埋納する風習が顕著になるのはこのころである。なお、東五十子城跡遺跡の第10号住居跡からは、玉類とともに多量の鉄製工具が出土しており、注意される。7世紀、遺跡数はひとつのピークを迎え、各遺跡における遺構の重複も顕著となる。いまい台産業団地造成に際する発掘調査では、一遺跡でじつに333軒の住居跡が検出された。薬師元屋舗遺跡第24号住居跡では、U字状のクワ先が出土している。

方形周溝墓は、弥生時代のものが市域においてほぼ皆無なのに対し、当該期の類例が今井諏訪遺跡（4世紀）と万年寺遺跡（4・5世紀）にて多数検出されている。ただし、後者の例に関しては、一辺30m以上で低墳丘をもつものもあり、一部方墳も含まれている可能性が高い。また、市内では、かつて200基以上の古墳が存在したとみられるが、今や盛土が残るものにして10基あまりを数えるにすぎない。これらのうち、八幡山古墳、蚕影山古墳^{こかげやま}、山ノ神古墳は、市指定文化財として保存されている。

児玉郡では古式古墳が多く知られ、本庄市内でも5世紀前半に築造されたとみられる事例が点在する。前山1号墳（前方後円墳）が最古とされ、木棺直葬で埴輪の用いられていない前山2号墳（方墳）がこれに次ぐ。小形埴と滑石製模造品の出土をみる万年寺つつじ山古墳（方墳）、これに隣接する万年寺八幡山古墳も埴輪を伴わない。やや後続の公卿塚古墳^{くげづか}は直径69mと推測される大型円墳で、格子目叩き技法の円筒埴輪と形象埴輪、滑石製模造品が出土している。このほか、埼玉県選定重要遺跡の旭・小島古墳群^{おじま}は、古墳の分布数（86基）において特筆されよう。また、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群については、古式群集墳の段階から形成が始まっていることが明らかになりつつある。

〔奈良・平安時代〕 ひき続き集落遺跡が多数に上る一方で、遺構の分布密度がやや散漫となる。将監塚遺跡や本庄城址内遺跡、大久保山遺跡の調査成果より、これらが計画的に建設された村落である可能性が指摘されている。計画性といえば、条里制遺構も重要な当該期遺構として挙げられよう。律令制のもと、地域集団単位でなされた大規模土木工事の痕跡で、水路が付随する。本庄市周辺の水路は、幹となる水路から順次枝分かれし（猿尾状水路）、水路が立体的に交差する（樋越し構造）点に特徴がある。産業団地造成や土地改良事業がさかんになる以前、女堀川流域には県内有数の条里遺構が分布していた。

特徴的な遺物を伴う遺跡としては、文字線刻紡錘車が見つかった薬師元屋舗遺跡と田端屋敷遺跡がまず挙げられる。前者第51号住居跡出土の紡錘車には、「武蔵野国児玉郡草田郷戸主大田部身万呂」の線刻があり、『和名抄』高山寺本に見える草田郷の所在を数百年ぶりに立証する文字資料となった。このほか、天神林Ⅱ遺跡第2号住居跡では、金属製品を模倣した可能性のある三足付き鍋状土器、本庄城址内遺跡第10号住居跡の床面からは、985年初鑄の唐国通宝がそれぞれ出土している。

〔中・近世〕 律令制が崩壊しつつあった古代末、市周辺では武蔵七党のひとつである児玉党が結成された。その後、児玉党の本流と分家は、児玉郡内に多くの居館を構え、それらが（伝）四方田氏館跡、（伝）富田氏館跡、（伝）今井氏館跡、栗崎館跡、本田館跡、東本庄館跡として残っている（いずれも未調査）。

やや下って15世紀後半、関東管領上杉氏と古河公方足利氏の対立が顕在化し、武蔵・上野を領する上杉方は、拠点として五十子陣（城）を構築した。以来、1478（文明10）年の上杉氏と古河公方との和睦がなるまで、同陣周辺はおおよそ20年にわたって戦乱の舞台となる。城跡という字名を現在に残す五十子陣は、久しく実態不明の史跡とされていた。しかし近年、広域圏清掃センターの建設に伴い、3年にわたる発掘調査が実施され、関連遺構や大量の土師器小皿、輸入陶磁器などが発見されている。

一方、大久保山寺院跡にほど近い東谷中世墓群では、未調査ながら古瀬戸や鉄釉の壺が採集されている。大久保山寺院跡は、児玉党本家である庄（莊）氏の菩提寺となる可能性があり、両遺跡の関連が注目

されている。このほか、社具路遺跡第4地点では、北宋銭や和鏡が埋納された墓穴が検出されている。

五十子陣廢絶の前後より、在地の庄氏は本宗家を本庄と呼ぶようになった。これが、本庄市の名のゆえんである。本庄氏は、東本庄にあった拠点を1556(弘治2)年に現在の市役所付近へ移して本庄城としたが、豊臣氏による小田原攻めの際、後北条氏にくみしたかどで滅亡に追いこまれてしまう。まもなく江戸の世となり、本庄城はわずか56年で廢城に至る。その後の同城周辺は、むしろ中山道沿いの宿場町として、今日の本庄市発展の礎を築いていくことになる。なお、市内において近世以降を対象として調査が行われた例はいまだまれで、他の時代の調査中に民家遺構や近世墓、陶磁器などが副次的に検出されるのみである。

〔近代〕市役所新庁舎建設に先がけて調査された製糸工場跡からは、ガラス瓶や養蚕関係の陶磁器が多量に出土した。日本鉄道本庄駅開業以来、近代の本庄は養蚕の町であり、製糸工場とその煙突は、町の景観の一部をなすものであった。また、神保原駅から小島万年寺を経由するトロッコ軌道跡は、烏川の砂利を採取する目的で敷設されたものであるが、この一部でも調査が行われている、さらに、戦時中の遺跡として、青葉隊の塹壕跡、排水施設と菓きょうが確認された児玉飛行場が挙げられる。

〔今井原屋敷遺跡周辺の概況〕大字名の「今井」は「新しい用水」を意味し、小字名の「原屋敷」は彼地に豪族が居住していたことを示している。児玉党の一派が今井氏を名乗ったことにも表れているように、前者は平安時代、後者は中世にまで起源をたずねうる古い地名である。また、本遺跡周辺に残る久城田くじょうだ、九反田くたんだなどの小字名は、古代の条里制水田に由来するとされる。夏から秋にかけて、大雨の後まれに付近から発生する野水ぐじょうみずは久城水と呼ばれ、かつての谷が埋没してできた地下水脈と関連があると考えられている。

市域西端の今井地区では、古墳時代から古代にかけての集落遺跡が比較的多く分布する。その中で本遺跡は、東の西今井遺跡と西の北共和遺跡および将監塚・古井戸遺跡にはさまれ、あたかも両者をつなぐような位置にある。なお、本遺跡より約2.1km北東に位置する(西富田)二本松遺跡は、関東地方における初期カマド導入の住居跡が昭和30年代に調査された事例として、学史的にも著名である。

III 調査の方法と経過

1 調査の方法

試掘調査の成果などを参考にし、遺構確認面をローム層上面と定め、その直上までは重機を用いて掘削した。その後、遺構の確認と調査は人力にて行った。掘削に先がけて、調査範囲のうち道路に面した箇所には防護柵を設置した。現地実測の基準として方眼基準杭と基準点を設置し、各種遺構図は手実測により縮尺1/20で作成した。遺構の写真撮影には、35mmのモノクロ、カラーネガ、リバーサルリバーサルの各フィルムを使用した。遺跡の略号は53-101とし、出土遺物の注記などにこれを用いた。遺物の取り扱いについては、接合にセメダインC、復元に石膏、写真撮影に35mm・6×7判モノクロフィルムをそれぞれ使用した。

2 調査の経過

発掘調査は、1999(平成11)年7月21日から同年8月25日にかけて実施された。遺構調査終了後、調査区を埋め戻して事業者側へ引き渡しを行った。整理調査は1999(平成11)年8月25日から2004(平成16)年3月31日にかけて実施し、同年3月31日付で報告書を刊行した。

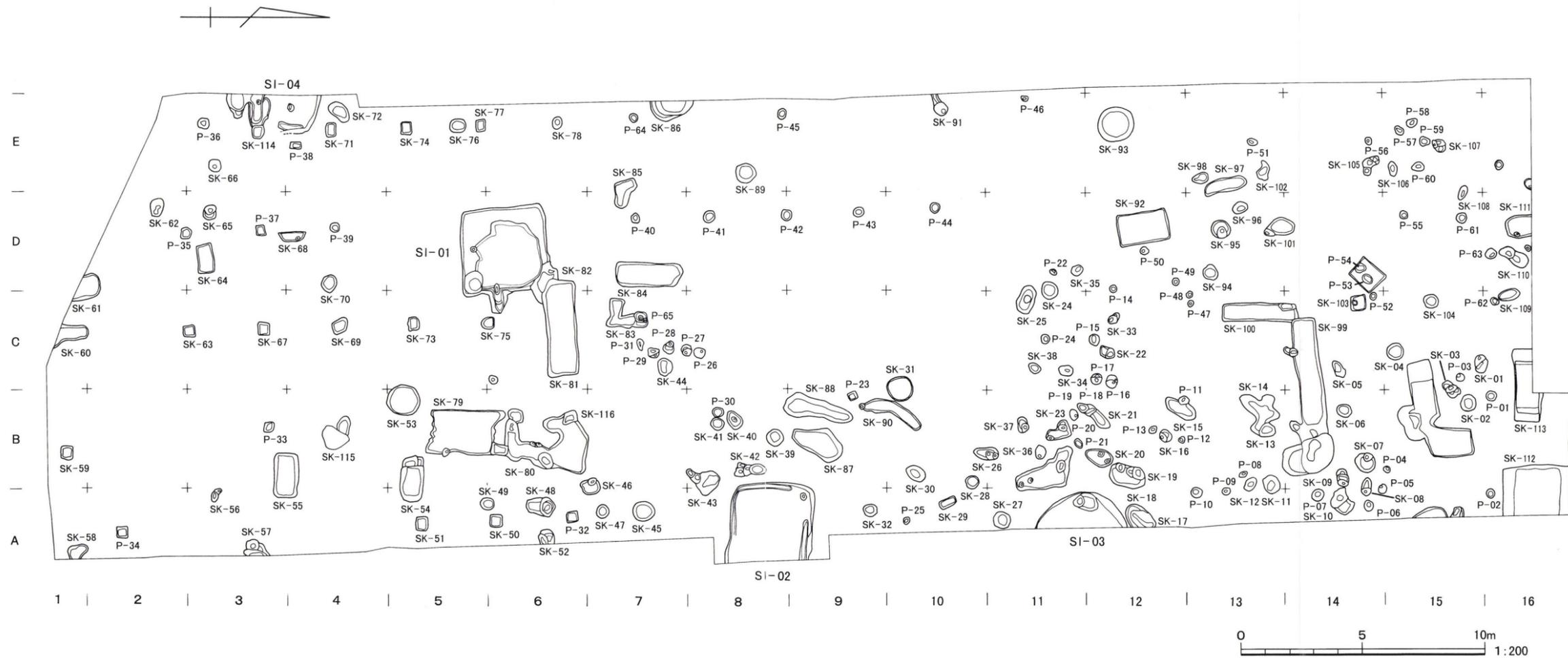


图4 遺跡全体図

IV 調査の成果

1 遺跡の概要

5,479 m²を対象とする調査で検出された遺構の内訳は、竪穴住居跡4軒、土坑 116 基、ピット 65 基である。調査面積に比すると、住居跡の分布密度は希薄といえる。一方、遺物としては、比較的残存状態の良好な土師器、須恵器、および砥石などの遺物が住居跡より見いだされている。

2 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

4軒が検出された。調査区の東部を除く範囲で散漫に分布する。後世における削平などの影響を受けたためか、総じて遺構上部の残存状態が悪く、遺構確認面から床面までの深さに乏しい。いずれもおおむね9世紀代に構築および廃絶されたものと考えられる。

SI-01 (図5・6、表1)

今回の調査で唯一、全体の形状や規模、付帯施設の有無を含めたおおまかな構造などを把握することが可能な住居跡である。

位置： 調査区西部、主としてD-6区に位置する。北東隅において、SK-81 および 82 による攪乱を受け

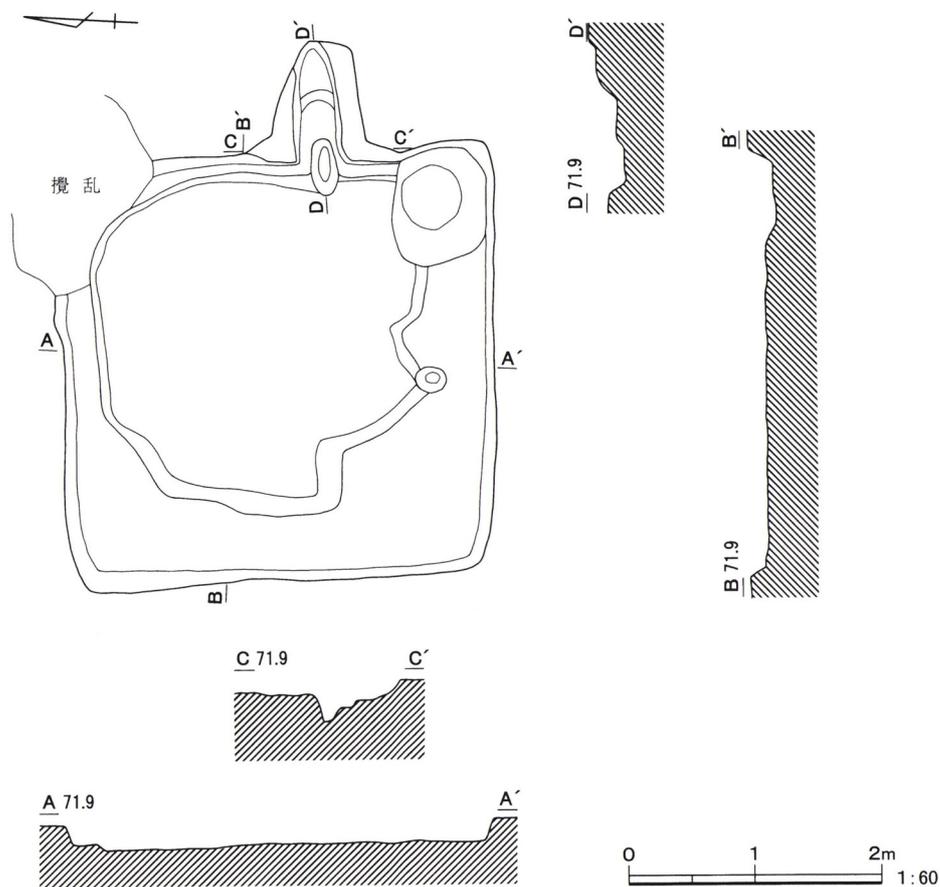


図5 SI-01

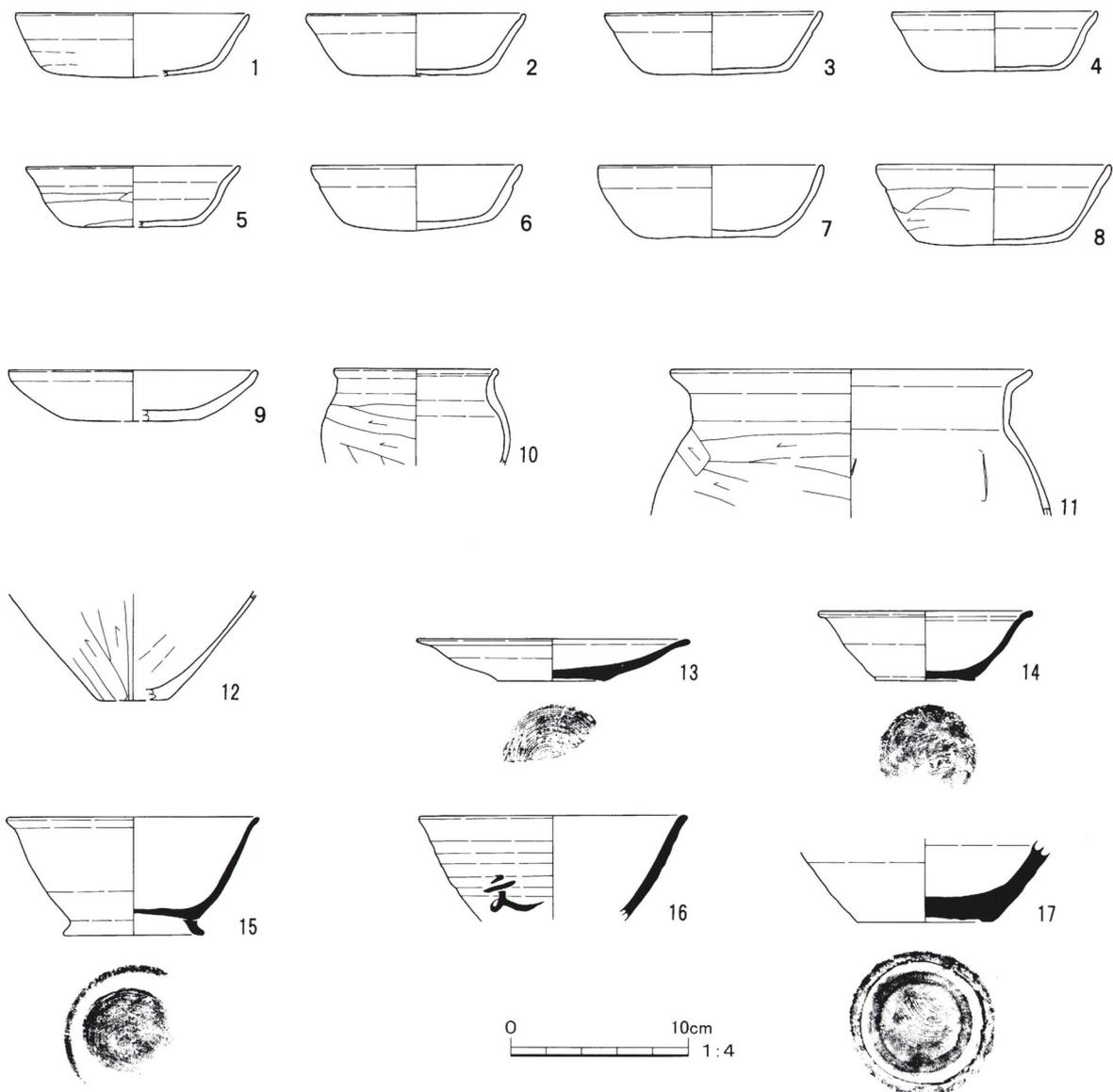


図6 SI-01 出土遺物

ている。主軸方位は、N-86°-Eである。

形状：長軸 3.42m、短軸 3.24m を測り、遺構確認面において隅丸正方形を呈する。断面は、おおむねゆるい逆台形状である。

構造：床面中央寄りの範囲は、壁際に比べごく微弱ながら低くなっている。遺構確認面から床面までの深さは、22cm を測る。壁面は、70° 前後の傾きにて立ち上がる。

カマドは、住居の東辺中央やや右寄りに設けられている。燃焼部とおぼしき箇所には、長径 46cm、短径 21cm、床面からの深さ 13cm のくぼみが認められる。住居東壁と床面との接点から煙出口までの長さは、約 1m を測る。また、カマドの右側には貯蔵穴がある。開口部において不整楕円形を呈し、長径 99cm、短径 72cm、床面からの深さは 30cm となっている。

なお、柱穴および周溝については、明瞭な痕跡が確認されなかった。床面中央南壁寄りには、ピットが 1 基認められる。長径 25cm、短径 20cm、深さは 10cm をそれぞれ測る。ただし、これを柱穴と見なすには、位置にやや難がある。

遺物：覆土より、土師器（図6- 1～ 12）と須恵器（同 13～ 17）が出土している。おおむね9世紀中葉

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 器 坏	口径 13.1 底径 8.9 器高 (3.5)	丸みを帯びた平底。口縁部は外反ぎみに開き、端部はわずかに内彎する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内－にぶい黄 橙色 外－に ぶい黄褐色	3/4。
2	土師器 器 坏	口径 (12.3) 底径 7.0 器高 3.6	やや丸みを帯びた平底。口縁部は外反ぎみに開き、端部はわずかに内彎する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部器面荒れており不明瞭、底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・角閃石 内－にぶい黄 橙色 外－橙 色	2/3。
3	土師器 器 坏	口径 12.3 底径 8.0 器高 3.5	わずかに丸みを帯びた平底。口縁部は外傾して開き、端部はわずかに内彎する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部器面荒れており不明瞭、底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・黒色粒 内外－明赤褐 色	3/4。
4	土師器 器 坏	口径 (11.6) 底径 (7.3) 器高 3.3	平底。体部～口縁部は彎曲し、口縁部は内彎する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部器面荒れており不明瞭、底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・黒色粒 内外－にぶい 褐色	1/4。
5	土師器 器 坏	口径 (12.0) 底径 (7.8) 器高 3.4	平底。口縁部は外反して開き、端部はわずかに内彎する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	角閃石・白色粒 内外－橙色	1/4。
6	土師器 器 坏	口径 11.9 底径 8.3 器高 3.7	丸みを帯びた底部。体部はやや丸みをもって立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。	外面－口縁部ヨコナデ、体部～底部器面荒れており不明瞭。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラナデ。	石英・白色粒・ 黒色粒 内外－橙色	2/3。
7	土師器 器 坏	口径 12.7 底径 7.8 器高 4.0	平底。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部はわずかに内彎する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部器面荒れており不明瞭、底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内外－にぶい 赤褐色	3/4。
8	土師器 器 坏	口径 (13.3) 底径 8.5 器高 4.5	わずかに丸みを帯びた平底。口縁部は外反ぎみに開き、端部は内彎する。体部との境にわずかに稜をもつ。	外面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラナデ。	石英・角閃石 内－橙色 外 －明赤褐色	2/3。
9	土師器 器 皿	口径 (14.0) 底径 (7.7) 器高 2.9	平底。体部は外傾し、口縁部は内彎ぎみに立ち上がる。	外面－口縁部ヨコナデ、体部器面荒れており不明瞭、底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－にぶい 褐色	1/4。
10	土師器 器 小型 甕	口径 (9.2) 底径 — 器高 —	ややふくらみをもつ胴部。口縁部は外反ぎみに立ち上がり、端部は内彎する。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	石英・チャー ト・黒色粒 内外－褐色	口縁部～胴部 上位 1/4 残 存。
11	土師器 器 甕	口径 (20.4) 底径 — 器高 —	口縁部はコの字状を呈する。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外－明赤褐 色	口縁部～胴部 上位 1/4 残 存。
12	土師器 器 甕	口径 — 底径 (4.1) 器高 —	わずかに丸みを帯びた平底。	外面－胴部～底部ヘラケズリ。内面－胴部～底部ヘラナデ。	石英・粗砂粒 内－橙色 外 －明褐色	胴部下位～底 部 1/3 残存。
13	須恵器 器 皿	口径 (15.3) 底径 (6.0) 器高 2.3	体部はやや丸みをもって開き、口縁部は外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り無調整。	チャート・黒色 粒 内外－暗灰黄 色	1/3。
14	須恵器 器 坏	口径 (11.9) 底径 5.5 器高 3.9	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内面に凹線が1条めぐる。	底部回転ヘラ起こし後、回転ヘラケズリ。	チャート・白色 粒・黒色粒 内外－灰色	1/2。
15	須恵器 器 碗	口径 (14.1) 底径 (7.9) 器高 6.6	外側に開く高台。体部はわずかに丸みをもって立ち上がり、口縁部は短く外反する。	底部回転ヘラ起こし後、回転ヘラケズリ。高台貼り付け後ナデ。	白色粒・粗砂粒 内外－黄褐色	3/4。
16	須恵器 器 碗	口径 (14.7) 底径 — 器高 —	体部はやや丸みをもって立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	ロクロ整形。	石英・白色粒・ 黒色粒 内外－灰黄色	口縁部～体部 下位 1/2 残 存。体部下位 外面に墨書。
17	須恵器 器 甕	口径 — 底径 7.6 器高 —	底部からややふくらみをもって開く胴部。	底部回転糸切り後、周縁部手持ちヘラケズリ。	白色粒・黒色粒 内外－灰白色	胴部下位～底 部一部残存。

表1 SI-01 出土遺物観察表

のものとみられる。土師器坏（1～9）は、6を除きいずれも平底を有する。また、16の須恵器碗では、体部下位外面に墨書が認められる。

時期： 出土遺物の内容から、9世紀中葉の住居跡である可能性が高い。

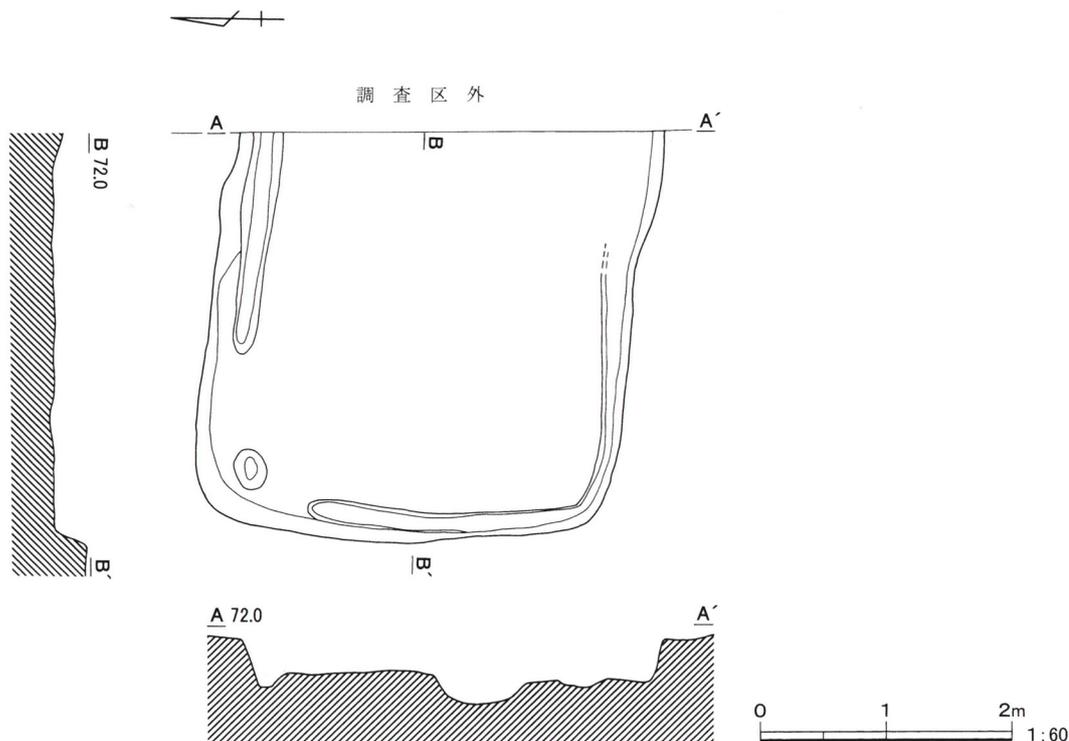


図7 SI-02

SI-02 (図7・8、表2)

位置： 調査区南部中央、主としてA-8・9区に位置する。東端は、調査区外に位置する。推定主軸方位は、S-86°-Eである。

形状： 短軸3.34m、調査範囲における長軸3.28mを測る。平面において隅丸長方形を呈するものとみられる。断面はおおむね逆台形状であるが、ところによっては不整形をなす。

構造： 遺構確認面から床面までの深さは20cmを測る。壁面は、70°前後の傾きにて立ち上がる。壁際の一部で、幅18cm、深さ12cmほどの周溝が認められる。住居跡東辺付近の調査区壁面には、カマドの痕跡とみられる粘土および焼土が認められる。柱穴および貯蔵穴とおぼしきものは見つかっていないが、貯蔵穴については、調査区外の住居跡右奥に存在していた可能性が高い。北西隅には、長径33cm、短径24cm、深さ15cmのピットがある。

遺物： 覆土より、土師器(図8-1~14)と須恵器(同15・16)に加え、砥石(17・18)が出土している。須恵器甕片2点については断定できないものの、出土遺物のほとんどは9世紀前葉の所産と考えられる。

土師器坏(1~7)のうち6・7は、器高が低く、口縁がわずかに外反する。5の内面には暗文と「×」の細線刻がある。8は鉢形の甑にも見えるが、器形および器種が判然としない。9・10の壺の口縁は、わずかに外反する。13・14の甕は、口縁部から頸部にかけておおむね断面くの字状を呈する。ただし、13では断面コの字状の甕に類似する成形および整形技法がとられており、また13・14とも胴部において念入りケズリが施され、器厚は4mm前後と薄い。

なお、2点の砥石は、ともに流紋岩製である。

時期： 出土遺物の内容から、9世紀前葉の住居跡である可能性が高い。

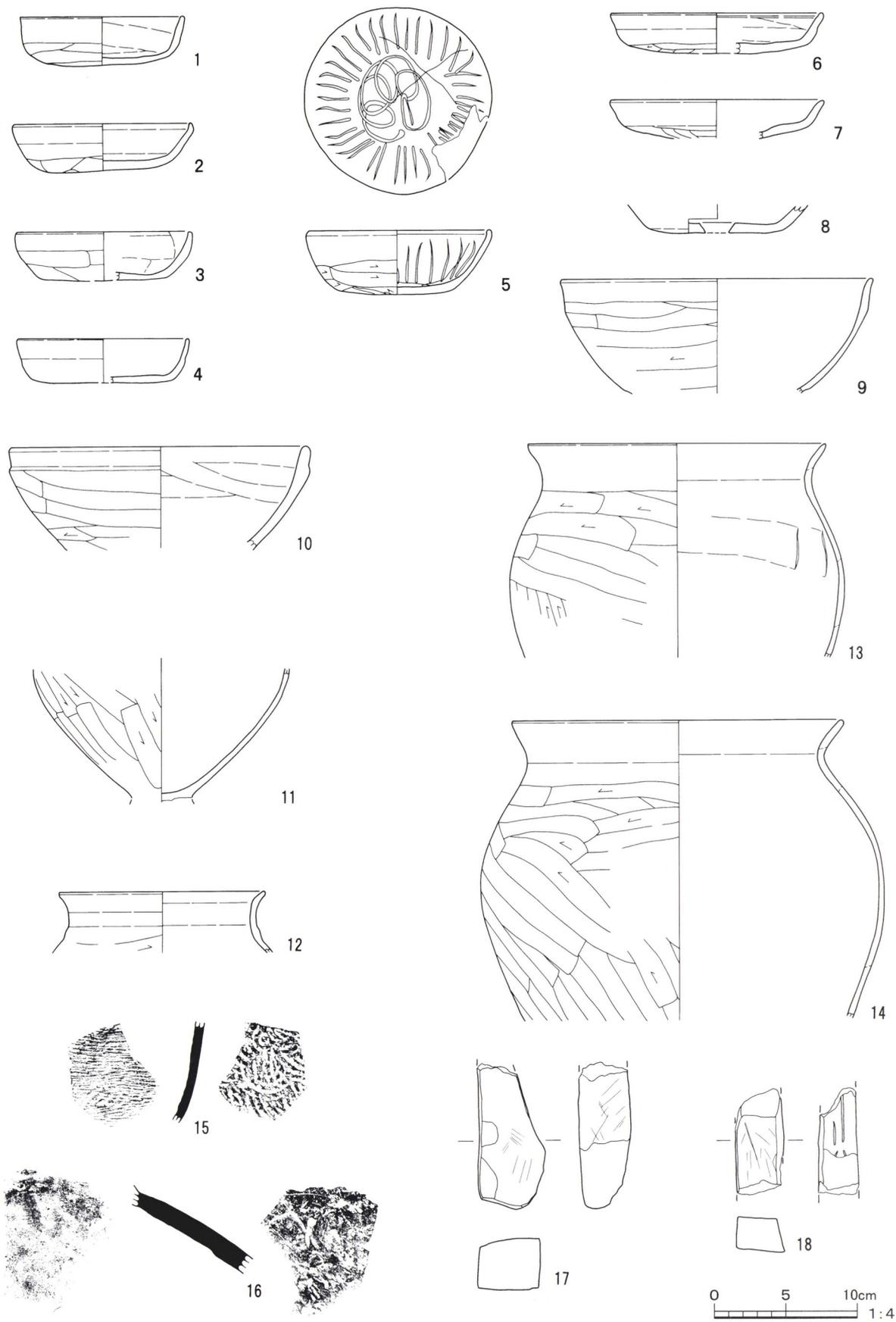


图8 SI-02 出土遺物

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 11.4 底径 6.7 器高 3.5	やや丸みを帯びた平底。口縁部は直立ぎみに立ち上がる。	外面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・黒色粒・褐色粒 内外－橙色	完形。
2	土師器 坏	口径 12.5 底径 6.5 器高 3.4	やや丸みを帯びた平底。体部はわずかに外反して開き、口縁部は内彎する。	外面－口縁部～体部上位ヨコナデ、体部下位～底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内外－橙色	完形。
3	土師器 坏	口径 (12.3) 底径 (8.7) 器高 3.4	わずかに丸みを帯びた平底。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部はわずかに内彎する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ後、一部ヘラナデ、底部ナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外－橙色	1/3。
4	土師器 坏	口径 (12.0) 底径 (10.0) 器高 3.1	わずかに丸みを帯びた平底。体部～口縁部は彎曲し、口縁部は内彎する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部器面荒れており不明瞭、底部ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内外－にぶい褐色	1/3。
5	土師器 坏	口径 12.6 底径 7.9 器高 4.6	やや丸みを帯びた平底。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部はわずかに内彎する。	外面－口縁部～体部上位ヨコナデ、体部下位～底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内外－橙色	一部欠損。内面に暗文、細線刻あり。
6	土師器 坏	口径 (14.8) 底径 (12.8) 器高 (2.8)	丸みを帯びた平底。口縁部は外反して開き、端部は内彎する。口縁部内面に凹線が1条めぐる。	外面－口縁部ヨコナデ、体部器面荒れており不明瞭、底部ヘラケズリ。内面－ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外－橙色	1/2。
7	土師器 坏	口径 (15.0) 底径 — 器高 —	やや丸みを帯びた平底。口縁部はわずかに外反して開く。	外面－口縁部～体部上位ヨコナデ、体部下位～底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	チャート・白色粒・黒色粒 内外－橙色	1/3。
8	土師器 (甌)	口径 — 底径 (9.5) 器高 —	やや丸みを帯びた平底。底部に焼成前穿孔。	外面－器面荒れており不明瞭。内面－ナデ。	石英・黒色粒・褐色粒 内外－橙色	底部 1/2 残存。
9	土師器 碗	口径 (21.9) 底径 — 器高 —	体部はわずかなふくらみをもって立ち上がる。口縁部はやや外反する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部上位ヨコナデ、体部下位ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外－明赤褐色	口縁部～体部下位 1/3 残存。
10	土師器 碗	口径 (20.9) 底径 — 器高 —	体部はややふくらみをもって立ち上がる。口縁部は体部との境に稜をもち、直立ぎみに外反する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	角閃石・粗砂粒 内外－にぶい黄褐色	口縁部～体部一部残存。
11	土師器 台付甕	口径 — 底径 — 器高 —	脚台部から上方に向かってふくらみはじめる胴部下位。	外面－胴部ヘラケズリ。内面－胴部ナデ。	石英・黒色粒 内－明赤褐色 外－にぶい黄褐色	胴部下位 1/3 残存。
12	土師器 甕	口径 (14.4) 底径 — 器高 —	口縁部はコの字状に近く、やや外反して開く。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部上位ヘラケズリ。内面－口縁部～胴部上位ヨコナデ。	石英・黒色粒 内－明赤褐色 外－赤褐色	口縁部～胴部上位一部残存。
13	土師器 甕	口径 (20.9) 底径 — 器高 —	胴部は上位にふくらみをもち、口縁部は外反して開く。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内外－明赤褐色	口縁部～胴部上位 1/4 残存。
14	土師器 甕	口径 23.2 底径 — 器高 —	胴部は上位にふくらみをもち、口縁部は外反して開く。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外－明赤褐色	口縁部～胴部上位ほぼ残存。
15	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —		外面－平行タタキ。内面－同心円文。	白色粒・黒色粒 内外－灰色	胴部破片。
16	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —		外面－タタキ後ナデ。内面－当て具後ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－灰色	肩部破片。
No.	種類	法量 (cm・g)				備考
17	砥石	残存長：10.2 幅：4.6 厚さ：3.7 残存重：194.11 流紋岩製				両端部欠損。
18	砥石	残存長：7.4 幅：3.9 厚さ：2.5 残存重：88.0 流紋岩製				両端部欠損。

表2 S1-02 出土遺物観察表

SI-03 (図9・10、表3)

位置： 調査区南部東寄り、主としてA-11・12区に位置する。遺構東部が調査区外に続いており、調査された範囲は全体の半分に満たない。主軸方位は不明である。

形状： 平面形は明確でないが、隅丸長方形ないし小判形を呈するものと推測される。断面は、おおむねゆるい逆台形状をなす。

構造： 遺構確認面から床面までの深さは、調査された範囲において最大37cmを測る。壁面は、70～80°の傾きにて立ち上がる。柱穴およびカマドの痕跡と認定しうるものは見つからないが、貯蔵穴とおぼしき長径1.02m、短径71cm、深さ44cmの土坑が、遺構西隅で検出されている。

遺物： 覆土より、土師器(図10-1・2)と須恵器(同3)の破片が出土している。

1の坏は平底、2の甕は口縁部から頸部にかけての断面形がコの字状に近い。1は9世紀中葉、2は9世

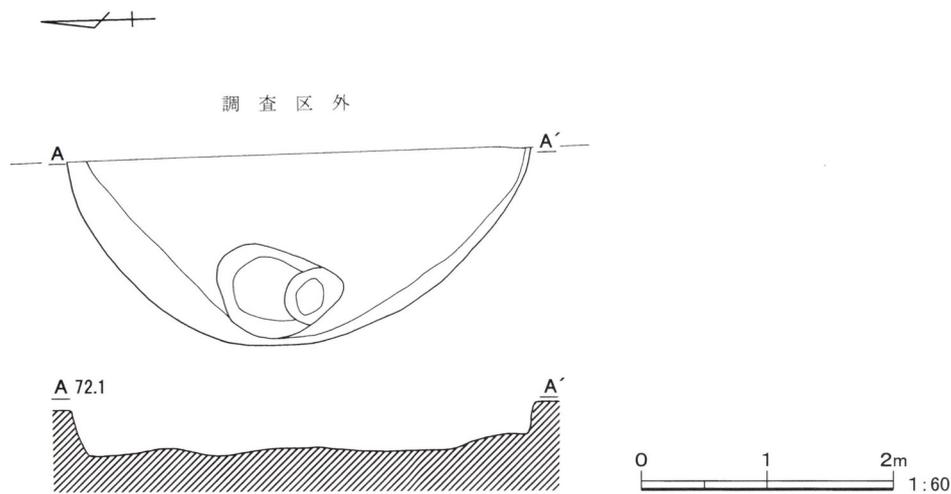


図9 SI-03

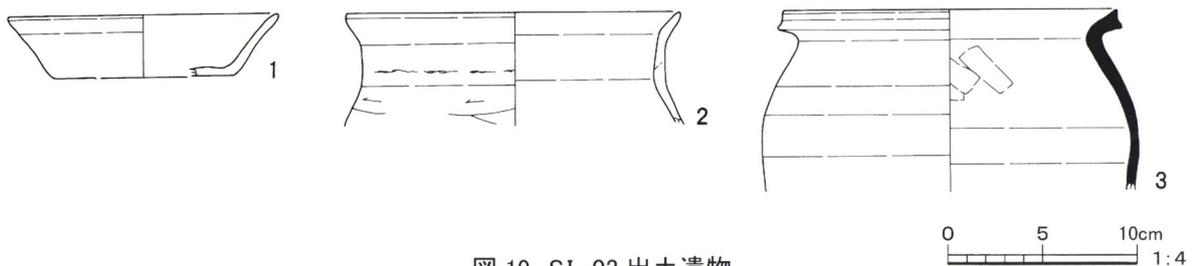


図10 SI-03 出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 (14.4) 底径 (9.5) 器高 3.3	平底。体部はやや外反して開き、口縁部に至る。	外面-口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面-口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラナデ。	角閃石・白色粒 内外-橙色	1/5。
2	土師器 甕	口径 (17.7) 底径 - 器高 -	口縁部はコの字状に近く、やや外反して開く。	外面-口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	石英・黒色粒 内外-にぶい黄橙色	口縁部1/4残存。
3	須恵器 甕	口径 (17.6) 底径 - 器高 -	胴部上位にふくらみをもち、口縁部は彎曲ぎみに外反する。	ロクロ整形。胴部上位内面に一部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外-灰色	口縁部～胴部上位1/5残存。

表3 SI-03 出土遺物観察表

紀前葉～中葉の所産とみられる。3は、須恵器甕の口縁部～胴部上位の破片である。

時期： 遺構の残存状況に有力な手がかりがなく、確然としないものの、出土遺物の内容からおおむね9世紀中葉に廃絶された遺構と考えられる。

SI-04 (図11・10、表4)

位置： 調査区南西隅、主としてE-3・4区に位置する。遺構西部が調査区外に続いており、調査された範囲は全体のごく一部にすぎない。カマドの一部において、SK-114による攪乱を受けている。主軸方位は不明である。

形状： 平面規模は不明である。平面形も明確でないが、住居の左奥隅とみられる箇所が検出されており、本来は隅丸長方形を呈していたものと推測される。断面は、ゆるい逆台形状をなす。

構造： 遺構確認面から床面までの深さは、調査された範囲において最大37cmを測る。壁面は、60～70°の傾きにて立ち上がる。カマドの左袖には、構築材である粘土が比較的良好な状態で残っていた。焚出口付近では、長径18cm、深さ20cmのくぼみが認められる。床面から燃焼部底面までの深さは、24cmである。カマドの向かって左側には、柱穴とみられる長径30cm、短径25cm、深さ20cmのピット1基、またピット東側の壁際では、幅26cm、深さ16cm前後の周溝がそれぞれ確認されている。

遺物： 覆土より、土師器(図12-1～5)と須恵器(同6)、および砥石(同7)の破片が出土している。主として9世紀前葉の所産である。

1の坏はやや丸みを帯びた平底。2の甕は口縁部から頸部にかけての断面形がコの字状に近いが、口縁部の屈曲がやや弱く、古相を示している。4の台付甕については、口縁部から頸部にかけての断面形がSI-02出土の甕と類似する。

7は絹雲母片岩製の板状礫で、両端部を欠損している。用途は不明である。

時期： 遺構の残存状況に有力な手がかりがなく、確然としないものの、出土遺物の内容からおおむね9世紀前葉に廃絶された遺構と考えられる。

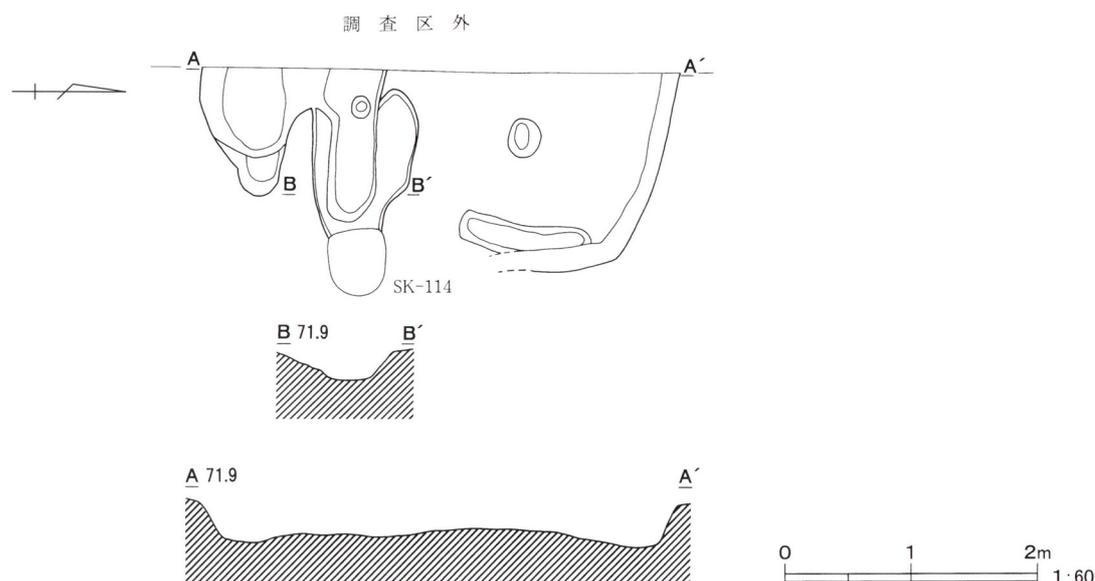


図11 SI-04

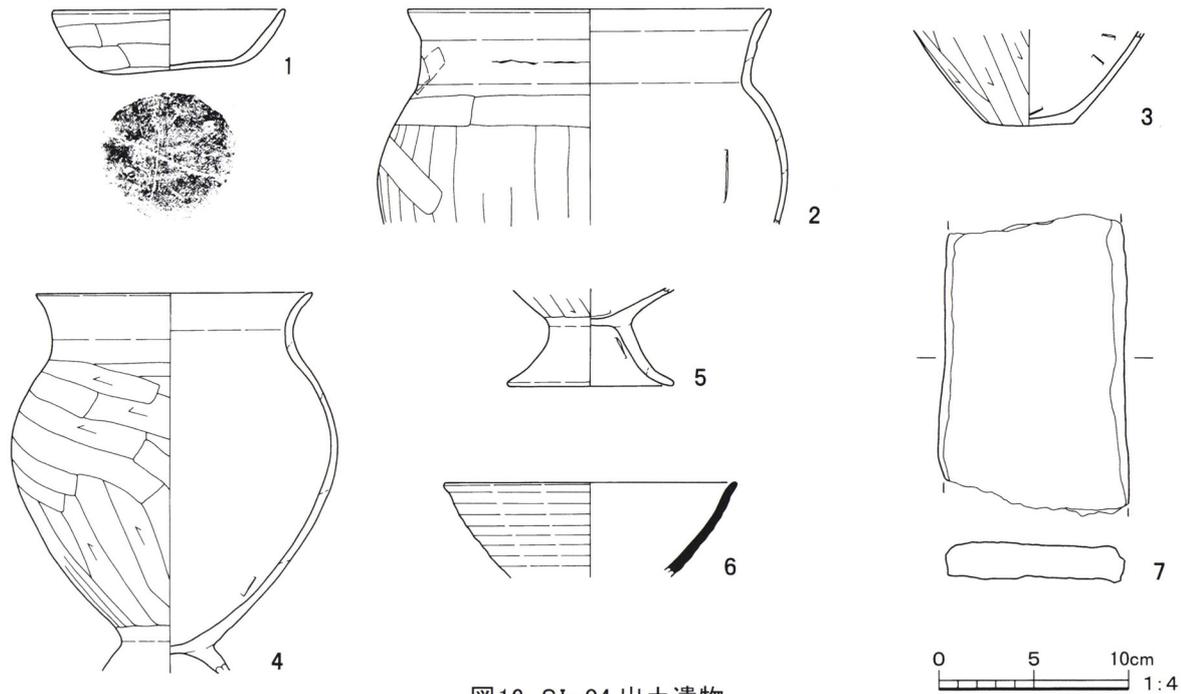


図12 SI-04 出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 杯	口径 (12.3) 底径 (7.5) 器高 3.4	やや丸みを帯びた平底。体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部に至る。	外面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラナデ。	石英・黒色粒・褐色粒 内外－橙色	1 / 2。
2	土師器 甕	口径 (19.2) 底径 — 器高 —	胴部上位にふくらみをもち、口縁部は外反する。	外面－口縁部ヨコナデ後、一部ヘラナデ、胴部ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外－橙色	口縁部～胴部上位 2 / 3 残存。
3	土師器 甕	口径 — 底径 4.6 器高 —	底部はわずかに丸みを帯びる。	外面－胴部下位～底部ヘラケズリ。内面－胴部下位～底部ヘラナデ。	雲母・白色粒・黒色粒 内－にぶい赤褐色 外－にぶい褐色	胴部下位～底部 2 / 3 残存。
4	土師器 台付甕	口径 14.4 底径 — 器高 —	胴部上位にふくらみをもち、口縁部は外反する。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、脚台部ヨコナデ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、脚台部ヨコナデ。	石英・黒色粒 内外－明赤褐色	脚台部欠損。
5	土師器 台付甕	口径 — 底径 8.9 器高 —	外反して開く脚台部。	外面－胴部下位ヘラケズリ、脚台部ヨコナデ。内面－胴部下位ヘラナデ、脚台部ヨコナデ。	雲母・黒色粒・粗砂粒 内外－橙色	脚台部残存。
6	須恵器 碗	口径 (15.6) 底径 — 器高 —	体部はややふくらみをもつ。	ロクロ整形。	白色粒・黒色粒 内外－灰黄色	口縁部～体部 1 / 5 残存。
No.	種類	法 量 (cm・g)				備考
7	礫	残存長：16.0 幅：10.1 厚さ：1.8 残存重：656.33 絹雲母片岩				両端部欠損。

表4 SI-04 出土遺物観察表

(2) その他の遺構

土坑 116 基、ピット 65 基のうち、配置に明確な規則性が見られず、性質・用途不詳の土坑・ピットについては、個別の図示および記述を行わず、表6・7の土坑・ピット一覧表にて計測値などを掲載するとともに、本項では、柱穴列の一種と認定しうる遺構(群)について概要を記す。

なお、今回の調査では、遺構確認面における長径が 50cm を上回るものを土坑(SK)、50 cm以下のものをピット(P)と呼び分けることとした。以下にとり上げる土坑・ピット群は、ピット群、もしくは柱穴列と呼称した方が、むしろ実質にかなっている。別言すれば、長径 50cm あまりの柱穴が多数検出されている点に、本

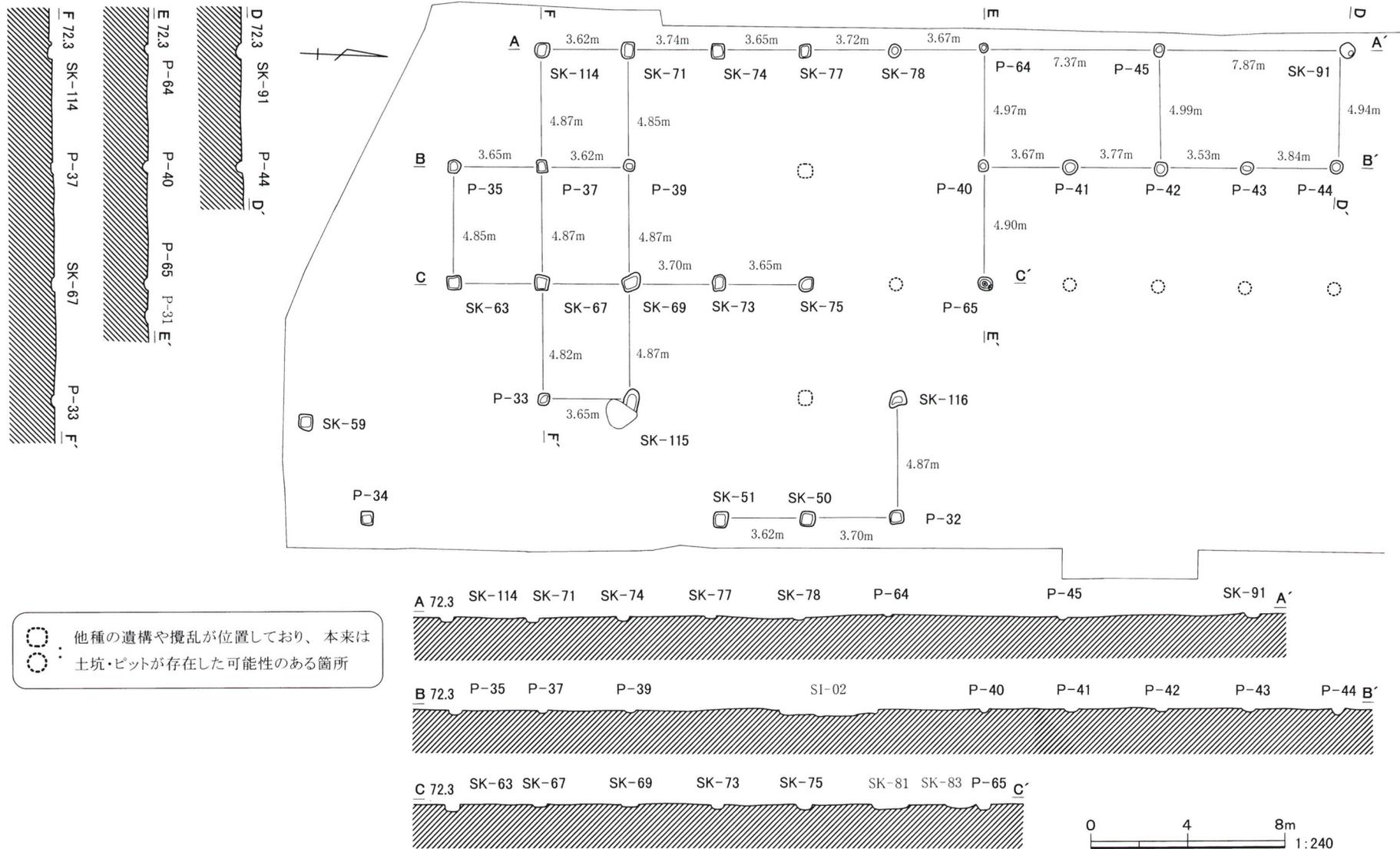


図13 土坑・ピット群

遺跡の大きな特徴を見出しうるのである。

土坑・ピット群（図13）

位置： 北部を除いた調査区の半分強の範囲を占める。遺構間を縦横に結ぶ線（配列軸）の方向は、東西南北のそれとほぼ一致する。

形状： 遺構群全体の規模は、南北 37.92m、東西 20.30m を測る。個別の土坑・ピットでは、遺構確認面において隅丸方形のものとおおむね円形を呈するものの2者が認められ、傾向として前者が後者よりやや大きい。隅丸方形のものは長軸 50～55cm、短軸 40～50cm、深さ 10～25cm の範疇に収まり、多くは東西方向に長径をもつ。円形のもののおおむねは、長径 40～50cm、短径 35～45cm、深さ 10～30cm である。

構造： 合計28基の土坑・ピットからなり、各遺構が平均にして南北3.70m、東西4.90mほどの間隔をもって位置する。規則正しく遺構が配置される箇所がある反面、ところどころに欠落もある。上述した遺構の形状ごとに一定の分布傾向が認められ、隅丸方形の遺構は南部、円形のものには北部に集中する。このことから、西部のSK-77と78の間を境界とし、遺構群が少なくとも南北の2グループに分かれる可能性が考えられる。SK-50・51、116、P-32の4基は、南のグループの一部、もしくは第3の小グループを構成するものかもしれない。

なお、図13において遺構間を結んだ線は、柱間の距離を推計した箇所に付したもので、必ずしも施設の上部構造を反映したものではない。

遺物： 本遺構(群)に伴うことが確実な遺物は出土していない。

時期： 不明である。

なお、調査区南東隅には、他の遺構と形状および規模の近似するSK-59とP-34があり、図13には図示しなかったが、北部にもやはり類似の土坑・ピットが複数存在する。ただし、いずれも上述の配列が示す軸からずれており、土坑・ピット群との関係は不明とせざるを得ない。

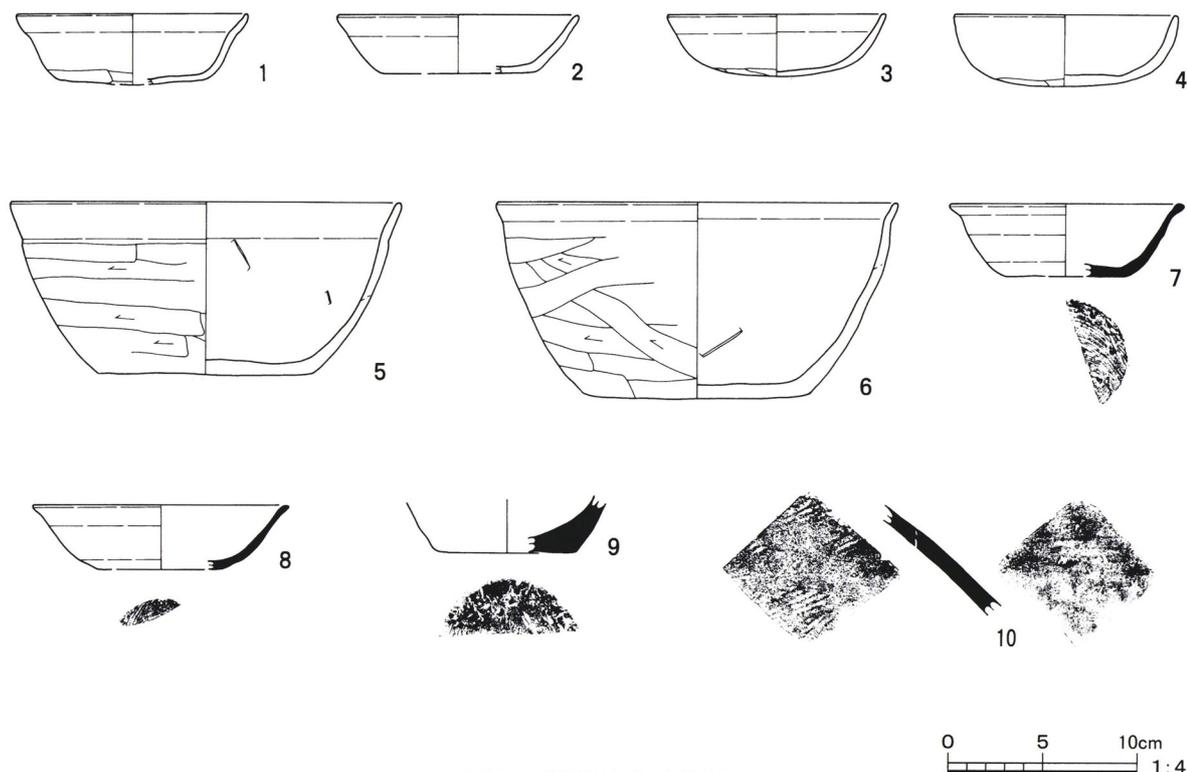


図14 遺構外出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 11.9 底径 (7.7) 器高 (3.8)	やや丸みを帯びた平底。体部はわずかに外反して開き、口縁部で内彎する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部上位器面荒れており不明瞭、体部下位～底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外－にぶい 橙色	底部一部欠損。
2	土師器 坏	口径 (12.8) 底径 (8.2) 器高 3.1	平底。体部はわずかに丸みを帯びて開き、口縁部に至る。	外面－口縁部ヨコナデ、体部器面荒れており不明瞭、底部ヘラケズリ。内面－器面荒れており不明瞭。	白色粒・黒色粒 粒・褐色粒 内外－橙色	口縁部～底部一部残存。
3	土師器 坏	口径 (11.6) 底径 — 器高 3.3	丸底。体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部に至る。	外面－口縁部～体部上位ヨコナデ、体部下位器面荒れており不明瞭、底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	雲母・粗砂粒 内外－明赤褐色	1／3。
4	土師器 坏	口径 (11.6) 底径 — 器高 3.7	丸底。体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部に至る。	外面－口縁部～体部器面荒れており不明瞭、底部ヘラケズリ。内面－口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内－橙色 外－褐色	1／6。
5	土師器 鉢	口径 (20.4) 底径 (11.4) 器高 10.1	やや丸みを帯びた平底。体部はわずかにふくらみをもって立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直線的に開く。	外面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内外－橙色	1／2。
6	土師器 鉢	口径 (21.0) 底径 (12.0) 器高 10.4	やや丸みを帯びた平底。体部はふくらみをもって立ち上がり、口縁部は外反する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内－橙色 外－明赤褐色	1／3。
7	須恵器 坏	口径 (12.0) 底径 (6.2) 器高 (3.8)	ロクロ成形。体部はやや丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。	底部回転糸切り無調整。	白色粒・黒色粒 内－灰オリーブ色 外－灰色	1／4。
8	須恵器 坏	口径 (13.4) 底径 (6.5) 器高 3.4	ロクロ成形。体部はやや丸みを帯びて開き、口縁部は外反する。	ロクロ整形後ナデ。底部回転糸切り無調整。	チャート・黒色粒 内外－灰色	口縁部～底部一部残存。
9	須恵器 (瓶)	口径 — 底径 (7.6) 器高 —	ロクロ成形。	底部糸切り後、ヘラナデ。胴部外面・底部内面に自然釉。	白色粒・褐色粒 内－浅黄色 外－暗灰色	底部 1／3 残存。
10	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —		外面－平行タタキ後、ナデ。内面－無文当て具後、ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－灰色	胴部破片。

表5 遺構外出土遺物観察表

(3) 遺構外出土遺物 (図 14、表5)

土師器 (1～6) と須恵器 (7～10) が、表土および攪乱などから見つかっている。遺構覆土より発見された遺物と比べ、時期的に大きな隔たりは認められない。

1～4は坏。平底をもつものが2個体含まれ、9世紀前葉～中葉に属するとみられる。5・6の鉢も9世紀代の産。7・8の坏、および9・10についても、詳細は判断できないものの、他の遺物が示す時期幅の範疇に収まるであろう。

遺構名	位置	平面形	規模 (m)		
			長径	短径	深さ
SK-01	C-15	楕円形	0.69	0.64	0.07
SK-02	B-15	円形	0.75	0.43	0.23
SK-03	B-15	不整楕円形	0.78	0.55	0.18
SK-04	C-15	円形	0.68	0.63	0.16
SK-05	C-14	不整楕円形	0.77	0.45	0.08
SK-06	B-14	円形	0.58	0.52	0.10
SK-07	B-14	円形	0.82	0.74	0.16
SK-08	A-14	楕円形	0.73	0.40	0.21
SK-09	B-14	楕円形	0.70	0.47	0.30
SK-10	A-14	(不整)楕丸長方形	1.00	0.71	0.38
SK-11	B-13	楕円形	0.73	0.62	0.30
SK-12	B-13	楕円形	0.63	0.42	0.22
SK-13	B-13	楕円形	0.59	0.53	0.21
SK-14	B-13	不整形	1.70	0.80	0.18
SK-15	B-12	隅丸長方形	1.41	0.60	0.12
SK-16	B-12	楕円形	0.51	0.46	0.19
SK-17	A-12	楕円形	1.00	0.72	0.60
SK-18	A-12	楕円形	1.14	0.84	0.20
SK-19	B-12	楕円形	1.50	0.84	0.20
SK-20	B-12	楕円形	1.14	0.67	0.19
SK-21	B-12	楕円形	0.86	0.47	0.14
SK-22	C-12	楕円形	0.71	0.44	0.14
SK-23	B-11	不整形	1.00	0.74	0.19
SK-24	D-11	円形	0.69	0.65	0.12
SK-25	C-11	楕円形	1.14	0.69	0.23
SK-26	B-11	楕円形	0.66	0.46	0.15

表6 土坑・ピット一覧表(1)

遺構名	位置	平面形	規模 (m)		
			長径	短径	深さ
SK-27	A-11	円形	0.74	0.68	0.21
SK-28	B-10	円形	0.53	0.52	0.25
SK-29	A-10	隅丸長方形	0.72	0.37	0.19
SK-30	B-10	楕円形	0.82	0.55	0.28
SK-31	C-10	円形	1.00	0.97	0.25
SK-32	A-9	円形	0.53	0.45	0.24
SK-33	C-12	楕円形	0.52	0.43	0.32
SK-34	C-11	楕円形	0.56	0.45	0.15
SK-35	D-11	楕円形	0.52	0.42	0.22
SK-36	B-11	楕円形	0.57	0.42	0.40
SK-37	B-11	楕円形	0.66	0.45	0.15
SK-38	C-11	楕円形	0.52	0.49	0.13
SK-39	B-8	楕円形	0.66	0.64	0.25
SK-40	B-8	楕円形	0.78	0.54	0.20
SK-41	B-8	円形	0.55	0.50	0.26
SK-42	B-8	不整形	1.28	0.57	0.37
SK-43	B-8	楕円形	1.00	0.87	0.38
SK-44	C-7	楕円形	0.74	0.58	0.18
SK-45	A-7	円形	0.91	0.83	0.18
SK-46	B-7	隅丸正方形	0.80	0.67	0.11
SK-47	A-7	円形	0.57	0.52	0.10
SK-48	A-6	不整形	1.17	0.79	0.30
SK-49	A-5	円形	0.57	0.50	0.30
SK-50	A-6	隅丸正方形	0.51	0.48	0.17
SK-51	A-5	隅丸正方形	0.56	0.49	0.19
SK-52	A-6	円形	0.57	0.52	0.28
SK-53	B-5	円形	1.32	1.17	0.16
SK-54	B-5	隅丸長方形	1.84	0.90	0.43
SK-55	B-4	隅丸長方形	1.83	1.01	0.35
SK-56	A-3	不整形	0.54	0.26	0.25
SK-57	A-3	不整形	0.80	0.78	0.39
SK-58	A-1	楕円形	0.81	0.58	0.14
SK-59	B-1	隅丸正方形	0.55	0.49	0.15
SK-60	C-1	不整形	1.18	0.58	0.05
SK-61	D-1	隅丸長方形	1.30	0.93	0.18
SK-62	D-2	楕円形	0.80	0.56	0.45
SK-63	C-3	隅丸正方形	0.46	0.42	0.27
SK-64	D-3	隅丸長方形	1.18	0.65	0.22
SK-65	D-3	円形	0.56	0.52	0.55
SK-66	E-3	円形	0.54	0.50	0.72
SK-67	C-3	隅丸正方形	0.52	0.45	0.07
SK-68	D-4	半月形	1.08	0.39	0.05
SK-69	C-4	隅丸長方形	0.70	0.53	0.06
SK-70	D-4	円形	0.68	0.60	0.08
SK-71	E-4	隅丸長方形	0.58	0.38	0.20
SK-72	E-4	楕円形	0.97	0.60	0.15
SK-73	C-5	隅丸長方形	0.54	0.45	0.18
SK-74	E-5	隅丸長方形	0.53	0.44	0.22
SK-75	C-6	円形	0.51	0.50	0.22
SK-76	E-5	円形	0.66	0.54	0.35
SK-77	E-5	隅丸長方形	0.50	0.34	0.12
SK-78	E-6	楕円形	0.50	0.39	0.15
SK-79	B-5	隅丸長方形	2.93	1.78	0.13
SK-80	B-6	不整形	3.32	—	0.25
SK-81	C-6	隅丸長方形	3.84	1.14	0.41
SK-82	D-6	楕円形	1.40	0.58	0.30
SK-83	C-7	隅丸長方形	0.65	0.53	0.22
SK-84	D-7	隅丸長方形	2.73	0.99	0.35
SK-85	E-7	不整形	1.10	0.92	0.21
SK-86	E-7	楕円形	1.72	0.80	0.50
SK-87	B-9	楕円形	2.15	1.16	0.20
SK-88	B-9	楕円形	2.83	1.13	0.22
SK-89	E-8	円形	0.79	0.75	0.30
SK-90	B-10	不整形	2.61	0.49	0.11
SK-91	E-10	不整形	0.91	0.50	0.22
SK-92	D-12	隅丸長方形	2.02	1.26	0.16
SK-93	E-12	円形	1.44	1.41	0.13
SK-94	D-13	円形	0.60	0.57	0.10
SK-95	D-13	円形	0.74	0.67	0.08
SK-96	D-13	楕円形	0.59	0.44	0.30
SK-97	E-13	楕円形	1.73	0.53	0.08
SK-98	E-13	楕円形	0.72	0.43	0.10
SK-99	C-14	隅丸長方形	[4.80]	1.00	0.20
SK-100	C-13	隅丸長方形	2.98	0.72	0.32
SK-101	D-13	楕円形	1.22	0.69	0.10
SK-102	E-13	不整形	0.62	0.42	0.10
SK-103	C-14	隅丸正方形	0.63	0.62	0.20
SK-104	C-15	円形	0.56	0.56	0.12

遺構名	位置	平面形	規模 (m)		
			長径	短径	深さ
SK-105	E-14	不整形	0.68	0.64	0.13
SK-106	E-15	楕円形	0.58	0.35	0.40
SK-107	E-15	円形	0.63	0.50	0.13
SK-108	E-15	楕円形	0.58	0.32	0.30
SK-109	C-16	楕円形	0.88	0.42	0.21
SK-110	D-16	隅丸長方形	1.20	0.59	0.28
SK-111	D-16	楕円形	1.03	0.90	0.07
SK-112	A-16	隅丸長方形	2.67	2.08	0.20
SK-113	B-16	隅丸長方形	2.95	1.06	0.18
SK-114	E-3	隅丸長方形	0.54	0.45	0.21
SK-115	B-4	隅丸長方形	0.60	0.46	0.20
SK-116	B-6	隅丸長方形	0.51	0.50	0.22
P-01	B-16	円形	0.42	0.40	0.13
P-02	A-16	円形	0.35	0.35	0.11
P-03	C-15	円形	0.35	0.35	0.48
P-04	B-15	円形	0.30	0.28	0.39
P-05	A-14	円形	0.35	0.32	0.31
P-06	A-14	円形	0.43	0.38	0.35
P-07	A-14	円形	0.49	0.48	0.20
P-08	B-13	楕円形	0.34	0.24	0.21
P-09	A-13	円形	0.36	0.28	0.20
P-10	A-13	円形	0.44	0.41	0.15
P-11	B-12	円形	0.38	0.37	0.25
P-12	B-12	隅丸三角形	0.25	0.24	0.10
P-13	B-12	円形	0.30	0.28	0.22
P-14	D-12	円形	0.31	0.30	0.08
P-15	C-12	円形	0.46	0.44	0.30
P-16	C-12	円形	0.49	0.46	0.28
P-17	C-12	円形	0.45	0.42	0.31
P-18	B-12	楕円形	0.47	0.42	0.21
P-19	B-11	円形	0.45	0.45	0.13
P-20	B-11	楕円形	0.46	0.34	0.31
P-21	B-11	楕円形	0.38	0.33	0.20
P-22	D-11	円形	0.22	0.22	0.20
P-23	B-9	隅丸長方形	0.48	0.33	0.25
P-24	C-11	円形	0.37	0.34	0.28
P-25	A-10	円形	0.27	0.25	0.15
P-26	C-8	円形	0.48	0.42	0.18
P-27	C-8	円形	0.44	0.44	0.32
P-28	C-7	円形	0.49	0.45	0.26
P-29	C-7	円形	0.46	0.36	0.18
P-30	B-8	円形	0.45	0.44	0.14
P-31	C-7	不整形	0.47	0.30	0.13
P-32	A-6	隅丸正方形	0.45	0.45	0.16
P-33	B-3	隅丸正方形	0.42	0.39	0.18
P-34	A-2	隅丸正方形	0.46	0.32	0.27
P-35	D-2	隅丸正方形	0.45	0.40	0.15
P-36	E-3	円形	0.49	0.40	0.30
P-37	D-3	隅丸正方形	0.39	0.35	0.10
P-38	E-4	隅丸長方形	0.43	0.28	0.25
P-39	D-4	円形	0.37	0.37	0.08
P-40	D-7	円形	0.42	0.33	0.20
P-41	D-8	円形	0.48	0.45	0.14
P-42	D-9	円形	0.48	0.42	0.19
P-43	D-9	円形	0.44	0.40	0.12
P-44	D-10	円形	0.42	0.39	0.30
P-45	E-8	円形	0.46	0.43	0.10
P-46	E-11	円形	0.29	0.25	0.30
P-47	C-13	円形	0.26	0.24	0.20
P-48	C-13	円形	0.27	0.27	0.14
P-49	D-12	円形	0.32	0.31	0.15
P-50	D-12	円形	0.33	0.28	0.23
P-51	E-13	楕円形	0.41	0.30	0.13
P-52	C-14	円形	0.29	0.27	0.18
P-53	D-14	楕円形	0.48	0.33	0.23
P-54	D-14	円形	0.42	0.40	0.20
P-55	D-15	楕円形	0.47	0.34	0.24
P-56	E-14	円形	0.27	0.24	0.07
P-57	E-15	楕円形	0.39	0.33	0.18
P-58	E-15	円形	0.45	0.36	0.15
P-59	E-15	円形	0.40	0.38	0.21
P-60	E-15	楕円形	0.47	0.34	0.24
P-61	D-15	円形	0.45	0.44	0.20
P-62	C-16	円形	0.35	0.32	0.13
P-63	D-16	円形	0.44	0.41	0.35
P-64	E-7	円形	0.46	0.41	0.15
P-65	C-7	円形	0.65	0.60	0.21

表7 土坑・ピット一覧表(2)

V ま と め

今回の調査は、1983(昭和58)年度調査区に北隣し、今井原屋敷遺跡の中央部分に相当する地点 5,479 m²を対象としたもので、竪穴住居跡4軒、土坑 116 基、ピット 65 基、および土師器・須恵器を中心とする遺物多数の検出をみた。

竪穴住居跡は、主として平安時代(9世紀前半代)に構築および廃絶されたものと考えられる。集落遺跡の中心部と目された範囲にしては、住居跡の分布密度は高くない。

一方、土坑・ピットは多数検出されており、なかでもIVにて土坑・ピット群と呼称した 28 基の柱穴列、東西南北をほぼ正確に指して配列される一群は特筆すべきであろう。上述した竪穴住居跡の散漫な分布状況と当該遺構群の存在は、今回の調査範囲がかつて単なる集落にとどまらない性質を帯びていたことをそろって暗示しているようにも見える。

上記柱穴列については、古代の官衙や寺院との関連を疑う余地があるかもしれない。近辺における類例としては、本庄市共栄地区所在の将監塚・古井戸遺跡のほか、岡部町中宿遺跡、美里町上野遺跡などが挙げられる。本遺跡から約 500m 南西に位置する将監塚・古井戸遺跡では、竪穴住居跡 186 軒、掘立柱建物跡 101 棟、井戸跡 10 基などが検出され、とりわけ掘立柱建物跡に関しては「郷家」との関係が指摘されている(井上 1991)。また、本遺跡の東方 8.1km にある中宿遺跡では、榛沢郡正倉跡と推定される倉庫跡群が検出された。ちなみに、官衙関連遺構が見つかった行田市小敷田、熊谷市北島、深谷市幡羅、岡部町中宿・熊野の各遺跡は、現在のJR高崎線に沿うようなゆるい弧を描きつつ、8km 強(2里)の間隔をもって並んでいる。本遺跡および将監塚・古井戸遺跡は、その弧が北西へ伸びる先に、やはり同様の間隔を置いて位置するものである。

帰属時期と性質・機能について、伴出遺物をはじめとする手がかりに恵まれなかったことから結局特定に至らず、本報告書では資料提示という主旨で上記柱穴列を扱うにとどまる。官衙との関連云々も現時点では根拠の乏しい憶測にすぎず、その当否を明らかにすべく、本遺跡周辺地域における調査事例のさらなる集積をまつ次第である。

主要参考文献

- 本庄市 1976 『本庄市史 資料編』
谷 旬 1982 「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター紀要』7 (財)千葉県文化財センター
坂本和俊 1984 「埼玉県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
本庄市 1986 『本庄市史 通史編 I』
井上尚明 1986 『将監塚・古井戸 古墳・歴史時代編』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸 歴史時代編』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
井上尚明 1991 「郷家に関する一試論」『埼玉考古学論集』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鳥羽政之・宮本直樹 1995 『中宿遺跡—推定・榛沢郡正倉跡の調査—』岡部町教育委員会
日本考古学協会茨城大会実行委員会 1995 『シンポジウム3 地方官衙とその周辺』
古代生産史研究会ほか 1997 『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』
外山政子 1998 「関東北西部地域の平安時代住居とカマド—群馬県矢田遺跡の検討から—」『法政考古学』第 24 集 法政考古学会
中沢良一・逸見恵大・田島康弘 2000 『上野遺跡(A・B地点)』美里町教育委員会
鳥羽政之・大谷 徹 2002 『埼玉考古学会シンポジウム 坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学会

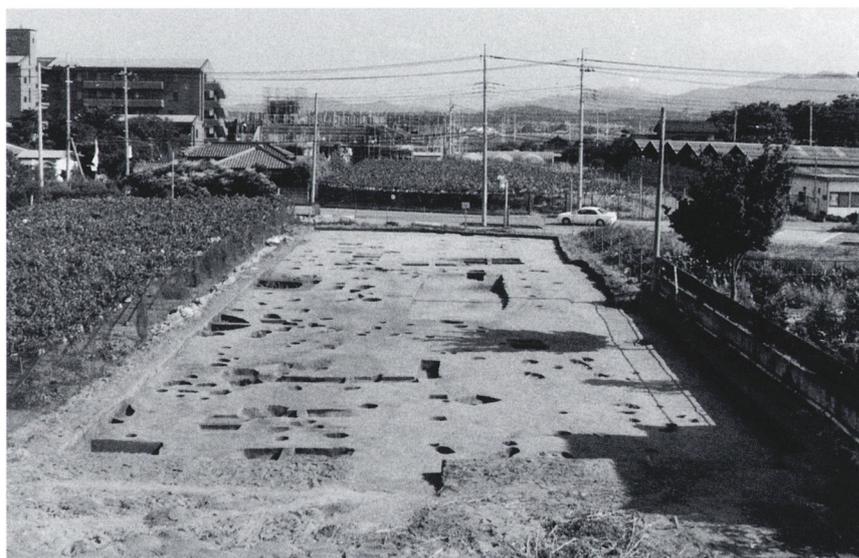
写 真 图 版



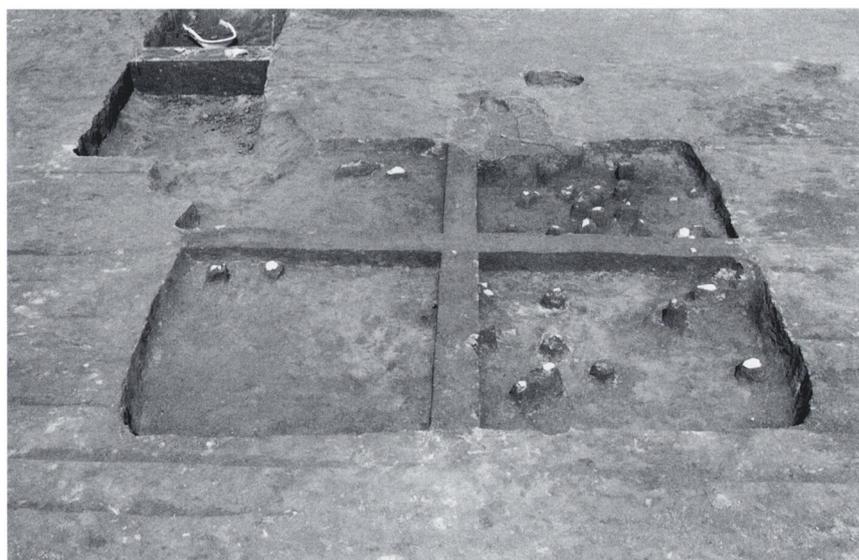
女堀川

遺跡の位置および周辺の地形

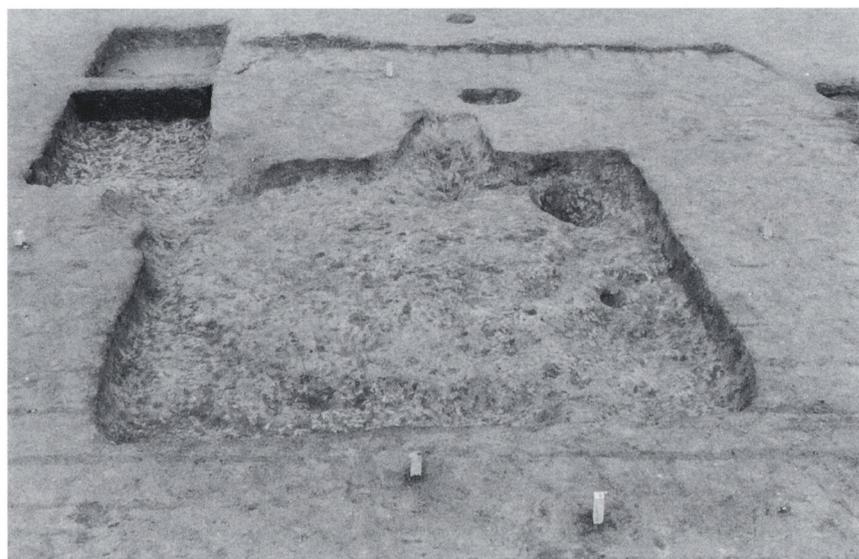
(国土地理院、2000年10月撮影)



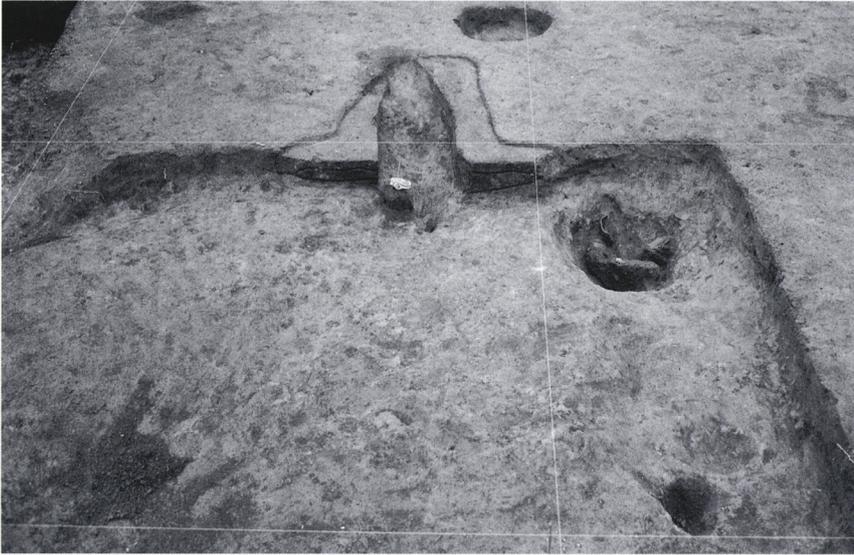
調査区全景



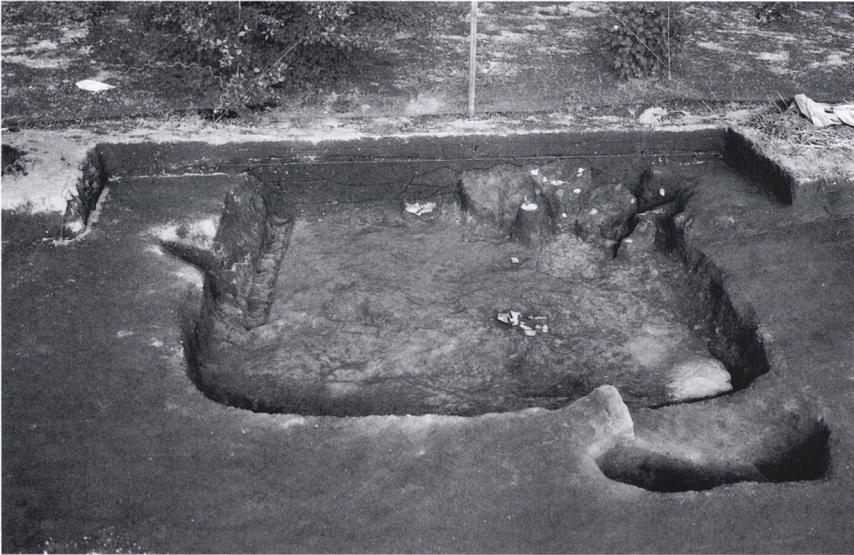
SI-01(1)



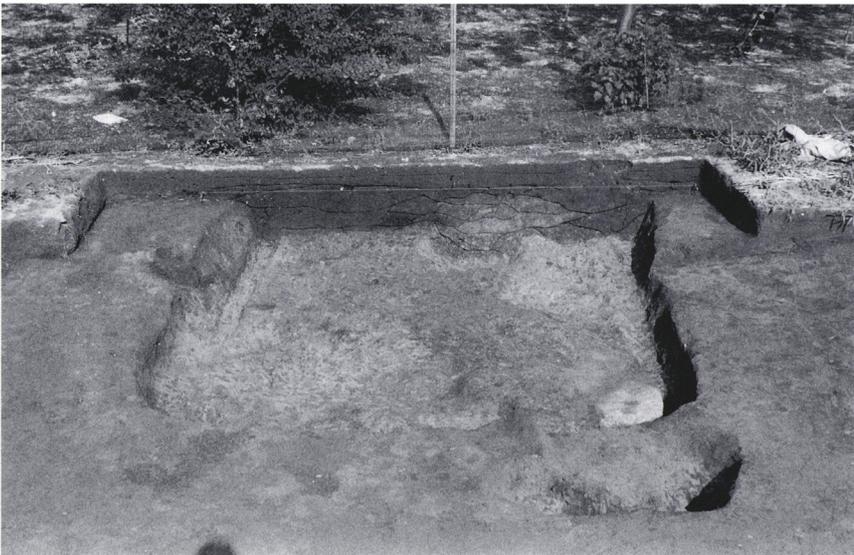
SI-01(2)



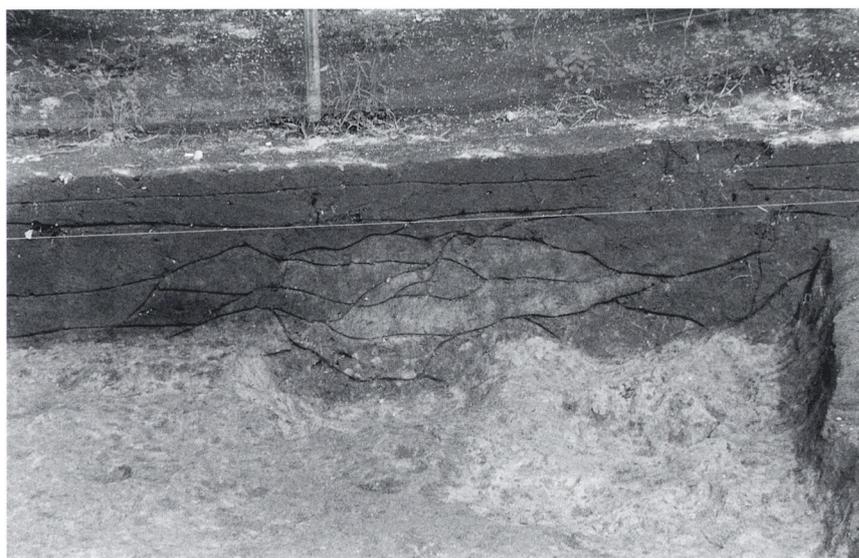
SI-01 カマド周辺



SI-02(1)



SI-02(2)



SI-02 カマド周辺



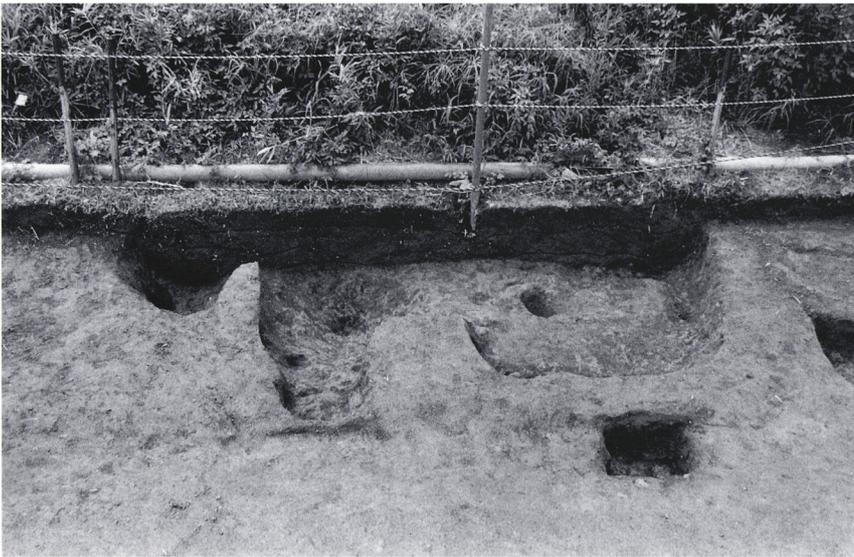
SI-02 遺物出土状況(1)



SI-02 遺物出土状況(2)



SI-03



SI-04



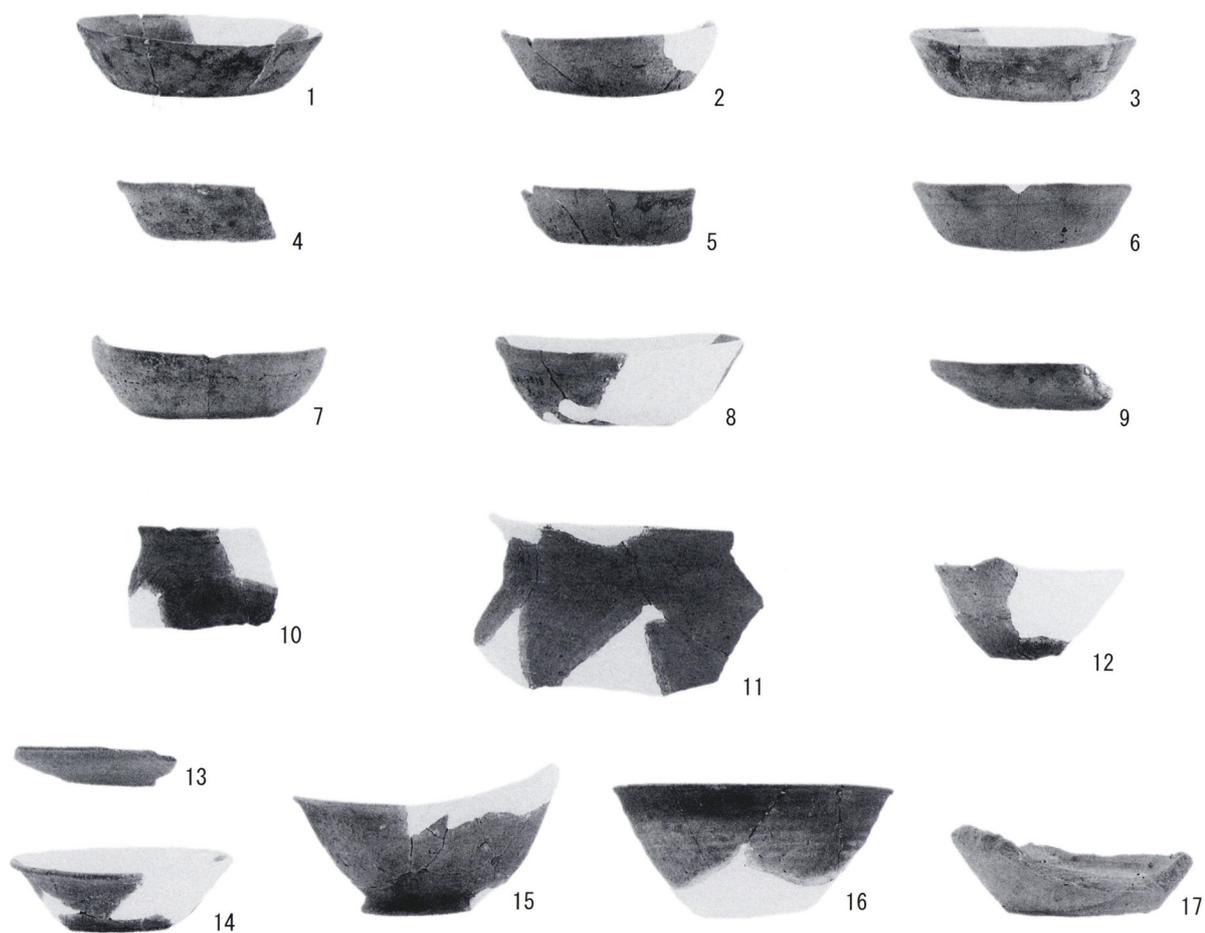
SI-04 カマド



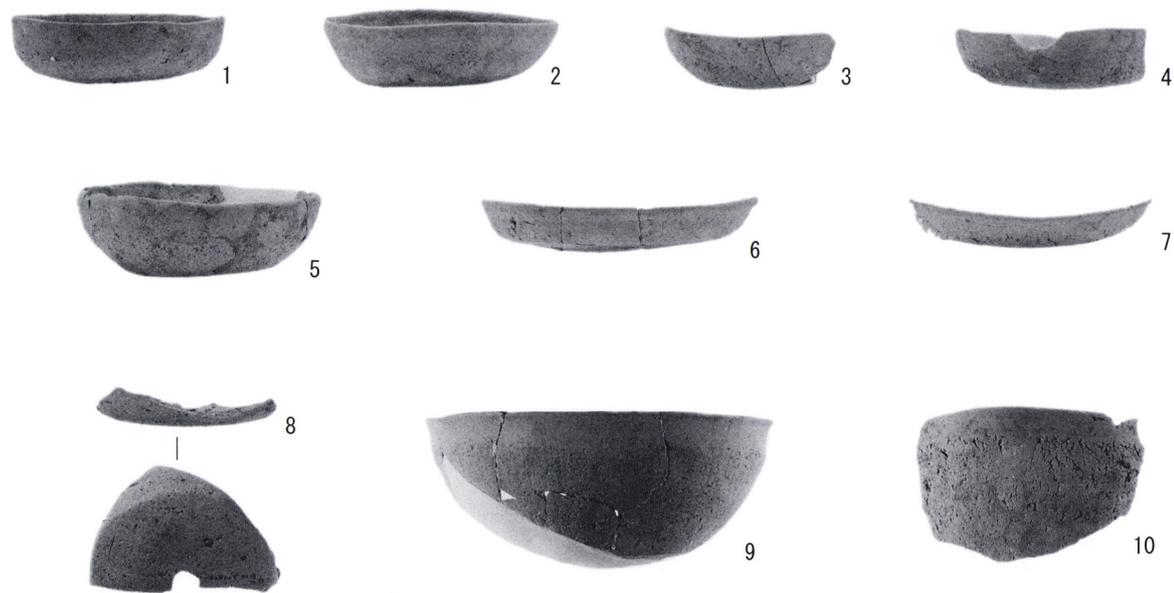
SI-04 遺物出土状況



調査風景



SI-01 出土遺物



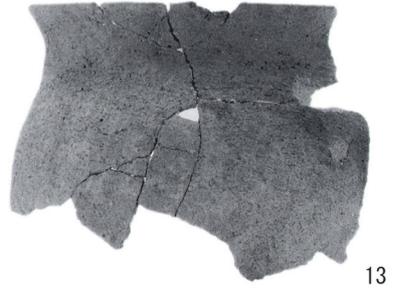
SI-02 出土遺物(1)



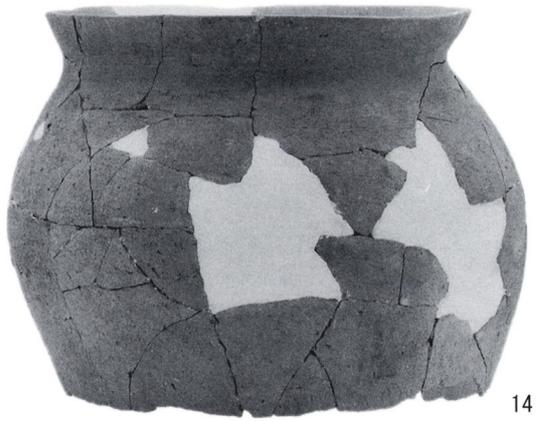
11



12



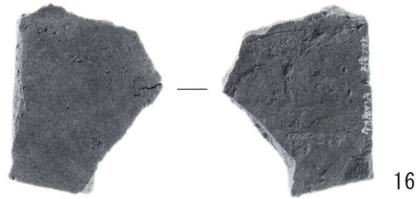
13



14



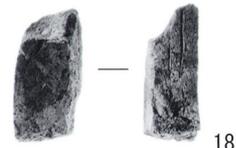
15



16



17



18

SI-02 出土遺物 (2)



1



2



3

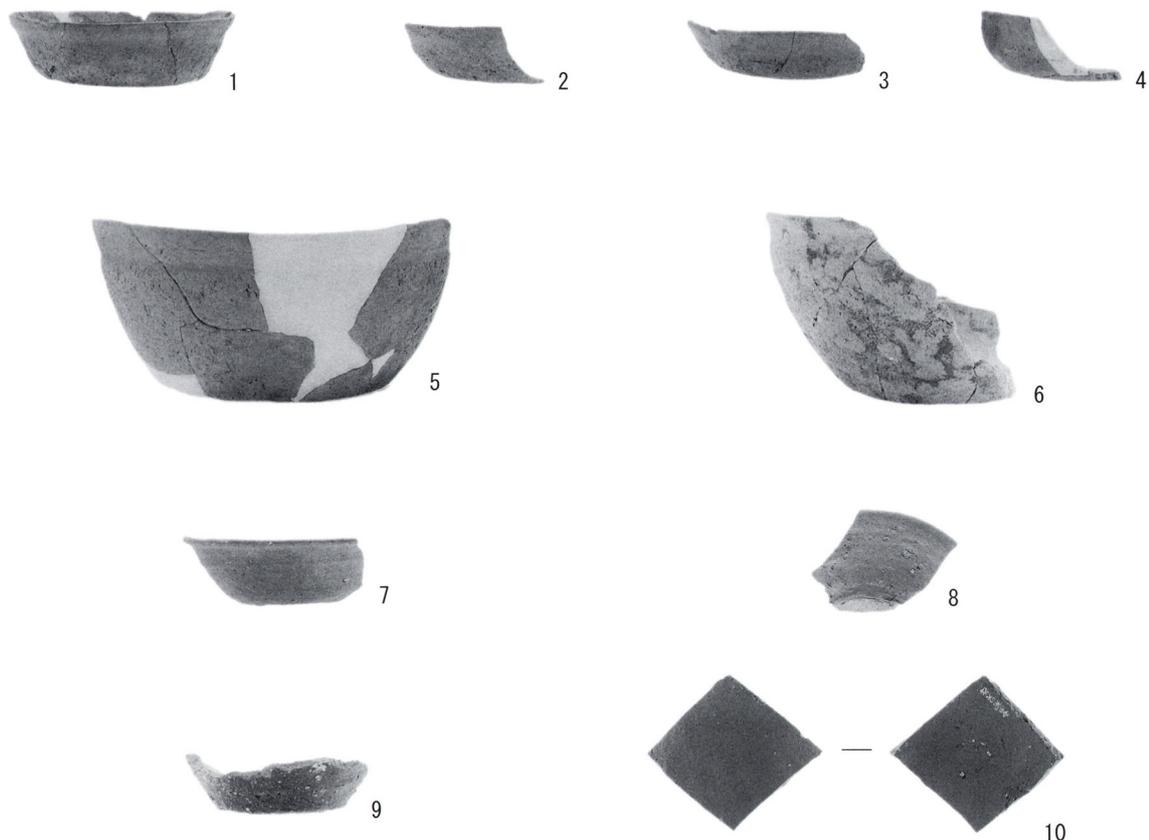
SI-03 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いまいはらやしきいせきだいにちてん							
書名	今井原屋敷遺跡 — 第2地点 —							
副書名	社会福祉法人本庄ひまわり福祉会 社会福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	本庄市遺跡調査会報告							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	増田一裕 太田博之 和久裕昭 有山径世							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会内 TEL 0495-25-1186							
発行年月日	西暦 2004(平成16)年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いまいはらやしき 今井原屋敷 いせきだいにちてん 遺跡第2地点	さいたまけんほんじょうし 埼玉県本庄市 おおあざいまあざはら 大字今井字原 やしき 屋敷1037番1 他	53	101	36° 13' 27" 36° 13' 16"	139° 09' 01" (新座標・世界測地系) 139° 09' 12" (旧座標・日本測地系)	1999 07 21 ~ 2004 03 31	5,479m ²	社会福祉 施設建設
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
今井原屋敷 遺跡第2地点	集落跡	奈良・平安時代		竪穴住居跡4軒、土坑 116基、ピット65基		土師器、須恵器、 砥石		土坑・ピット28基の配置 に明瞭な規則性あり



SI-04 出土遺物



遺構外出土遺物

本庄市遺跡調査会報告 第9集

今井原屋敷遺跡

—第2地点—

社会福祉法人本庄ひまわり福祉会社会福祉
施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年3月25日 印刷

平成16年3月31日 発行

発行／本庄市遺跡調査会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

本庄市教育委員会内

電話 0495-25-1186

印刷／朝日印刷工業株式会社

